

入元僧古源邵元の軌跡(下)

嵩山少林寺首座から京都東福寺住持へ

佐藤秀孝

帰国から天龍寺夢窓下での乗弘

古源：貞和丁亥、皈_二本朝_一。

扶桑

延宝：依_二夢窓于天龍、登_二居_一前堂_一。

本朝：(在_レ元二十一年、以_二本朝貞和丁亥_一而帰、母已去世。計_二

其日、乃現_レ夢之時也。)依_二夢窓国師_一、居_二天龍前堂_一。

久しく河南・河北を中心とした元朝の北地禅林にあって輝かしい事跡を残した邵元は、やがて老母の靈夢を契機として望郷の念に駆られたとされる。「古源和尚伝」と『本朝高僧伝』によれば、邵元が帰国の途に着いたのは日本の貞和丁亥すなわち北朝の貞和三年(南朝の正平二年、一三四七)に至ったこととされる。貞和三年は元の至正七年に当たっているから、実に邵元の在元期間は日本の嘉暦二年(一二三七)すなわち元の泰定四年に入元してより数えて足

掛け二一年もの久しきに渡っていたことが知られる。⁽²⁾

邵元がその在元中に赴いた地域の範囲も、南は福建省の福州から西は湖北省の荊州や湖南省の洞庭湖、東は山東省の泰山から北は山西省の五臺山や元の国都である大都(北京)にまで及んでおり、これは当時の入元僧がなした動静としてはきわめて広範に渡っていて、かなり異例のものであったといつてよい。この間、邵元は臨済・曹洞両宗の禅者のみでなく、官僚士大夫や庶民など元朝国内の多くの道俗と積極的な交友をなしていたものと見られるが、その足跡の詳細は定かでない。

おそらく邵元は帰国に際して大都より一旦は明州慶元路(寧波)へと南下し、さらに明州府港で日本に向かう商船に身を託して帰途に着いたものと見られる。二一年という歳月を経て漸く東シナ海を日本に戻る邵元の心境とは如何ほどのものであったのだろうか。筑前(福岡県)博多から大

宰府に辿り着いたであろう邵元は、瀬戸内海を経由して畿内に到り、そのまま上洛しているものと推測される。かつて三三歳の壮年で入元した邵元も、すでにこのとき五三歳という熟齢に達していたわけであり、人生の最も充実した時期を邵元は故国日本を離れた異郷の地に送ったことになる。

邵元は後醍醐天皇(諱は尊治、一二八八—一三三九、在位は一三二八—一三三九)による建武政権が樹立される以前の鎌倉最末期に入元を果たし、二〇年以上に及ぶ歳月を経て帰国したわけであるが、南北朝動乱に揺れていた当時の故国日本の情勢をどのように見たのかは定かでない。しかしながら、これ以降、邵元は京都禅林を中心に活動を展開し、時代の大きなうねりの中に身を置くことになるのである。

貞和三年の内かその翌年には京都に辿り着いたと見られる邵元は、すぐさま郷里の越前(福井県)に残した年老いた母親の消息を尋ねたものらしく、このとき彼は自らがつて大都(北京)の水月寺で靈夢を感じたのと同じ日に母が逝去していた事実を知らされたと伝えられる。邵元が五三歳であれば、母はすでに七五歳前後には達していた計算になる。おそらく後に邵元の塔頭となった東福寺山内の南泉庵には邵元の両親の位牌なども安置されていたはずであるが、すでに廃絶して久しいことから父母の消息や俗

姓などについて何ら詳らかでないのが惜しまれる。

ところで『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』によれば、帰国して後まもなく邵元は京都禅林に落ち着いたものらしく、仏光派(夢窓派祖)の夢窓疎石(木訥叟・夢窓正覚心宗普濟国師、一二七五—一三五二)と交渉を持ったことが伝えられている。疎石は邵元よりは二〇歳ほど年長であり、邵元と同じ臨濟宗破庵派に属し、渡來僧の無学祖元(子元・仏光円満常照国師、一二二六—一二八六)の高弟である高峰顯日(仏国応供広濟国師、一二四一—一三二六)に参じて法を嗣いでいる。疎石の足跡は日本禅宗史上に特筆すべきものがあり、夢窓派の祖として多くの法嗣を育成して五山派の一大動脈の源流となった祖師として知られ、中世の五山叢林を代表する禅者にほかならない。⁽³⁾

『延宝伝燈録』によれば、夢窓を天龍に依り、登りて前堂に居す」とあり、『本朝高僧伝』では帰国した直後の記事として「夢窓国師に依り、天龍の前堂に居す」と記されており、邵元の方から疎石のもとに接近し、京都嵯峨野の靈龜山天龍資聖禅寺にて乗払して前堂首座の職位を勤めたことくに伝えている。天龍寺はいうまでもなく南朝の後醍醐天皇が北朝の暦応二年(南朝の延元四年、一三三九)八月一六日に大和(奈良県)吉野郡の吉野宮にて崩御した後、その菩提を弔うため北朝方の征夷大將軍であった足利尊氏

(もと高氏、等持院殿仁山妙義、一三〇五—一三五八)が疎石の勧めで龜山殿を禪刹に改めて創建したものであり、開山始祖には疎石自身が迎えられている。伽藍の造営賞を獲得するため天龍寺船が元国に派遣されたことは名高く、北朝の康永二年(南朝の興国四年、一三四三)には仏殿・法堂・山門などが完成しているから、邵元が到った当時はすでに天龍寺は諸堂の整備された大禅院として機能していたこととなる⁽⁴⁾。

帰国した直後の邵元が古巢である聖一派の禪者のもとにおいてではなく、疎石に招かれて天龍寺で首座を勤めることになった事情は定かでない。「古源和尚伝」には疎石との関わりをまったく触れていないが、これはおそらく「古源和尚伝」の撰者が邵元の活動を聖一派内の消息に限定し、他派である夢窓派との関わりを故意に伏せたためではなからうか。

この点、邵元と疎石の関わりを窺う上で興味深い記載として、疎石の『夢窓国師語録』巻下「偶頌」に、

古源。

曹溪一滴先⁽⁵⁾威音、流遠方知⁽⁶⁾出処深、可惜今時未⁽⁷⁾還客、外求⁽⁸⁾竺土大仙心。

という偶頌が残されていることである。この「古源」の偶頌が明確に邵元のことを指しているのか否かは定かでない。

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

いが、「曹溪の一滴、威音に先んじ、流れは遠くして方に出処の深きことを知る。惜しむべし、今時未だ還らざる客、外に竺土大仙の心を求む」という内容からして、かつて法を求めて元朝へと旅立った邵元を懐かしむもののようにも読み取られる。この偶頌を認めた際の疎石は、仏法を求めて遠く元朝へと旅立つて久しい邵元の消息を思いやるのであり、疎石には早くから邵元の帰国を待ち望んでいた感がある⁽⁹⁾。

威音王仏以前の曹溪の一滴水とは禅の宗旨のこと、我々の本来の面目のときものを指しており、仏心を外に向かつて求めることを惜しむ内容となっている。いまだ帰らざる客であった邵元は、遙か元朝の地に竺土大仙の心すなわちインド(天竺)の仏陀の教えを馳せ求めていたのであり、そんな邵元を疎石は久しく待ちわびていた心情が窺われる⁽¹⁰⁾。おそらく邵元は入元する以前から、何らかのかたちで年長の疎石と道交を持つ機会を得ていたのではなからうか。二〇余年の歳月を経て帰国した邵元のことを聞き知った疎石がいち早く率先して天龍寺の前堂首座に拝請し、邵元もその申し出を快く承諾したというのが実情であろう⁽¹¹⁾。

ところで京都の東山建仁寺の塔頭西足院には疎石の法嗣である中岩中本が編した『夢窓国師会下業弘法語』(内題は『靈龜山天竜資聖禪寺業弘』)と題する写本一冊が所蔵されて

おり、北朝の貞和元年から観応二年(南朝の正平六年、一三五二)に至る間に天龍寺の疎石の会下(嚴密には疎石の東堂期を含む)で行なわれた兼弘法語を集め録している。その中に北朝の貞和四年(南朝の正平三年、一三四八)の冬至(この年の冬至は二月二日)に首座を勤めて兼弘したのが「古源契源」であったと記されている。すなわち、『夢窓国師会下兼弘法語』には、

冬至。素話。首座。古源契源。

野匠削撲、不假墨索、若是真材、便清就断。

仰山叉手進前、指鹿為馬、香嚴進前叉手、証龜作鱗。拈主丈云、上方木上座、別逞神通、全機透脱、直秉造化幹旋之權、能応陰陽窮變之節。卓一下云、六陰剥。又卓一下云、一陽復便見、春入寒梢、開柳眼、梅吐冷蕊、衆氷骨。物物総純真、頭頭皆合轍。是則是、只如無陰陽地、作麼生通箇消息。又卓一下云、昨夜虚空生芽孽。

という首座の古源契源がなした兼弘法語が収められている。ここにいう古源契源とはいうまでもなく邵元のことを指しているものと見てよい。便宜上、やはり邵元の兼弘法語のことは書き下してみるならば、およそつきのごとくになる。

野匠は削撲するに墨索を假らず、若し是れ真の材ならば、便ち清く断るを就さん。

「仰山の叉手して進前するは、鹿を指して馬と為す、香嚴の進

前して叉手するは、龜を証して鱗と作す」と。主丈を拈じて云く、「上方の木上座、別に神通を逞しくして、全機透脱し、直に造化幹旋の權を乗り、能く陰陽窮變の節に応ず」と。卓すること一下して云く、「六陰、剥がる」と。又た卓すること一下して云く、「一陽、復た便ち見われ、春は寒梢に入りて柳眼開き、梅は冷蕊を吐いて氷骨衆かなり。物物は総て純真にして、頭頭は皆な合轍す。是なることは則ち是なるも、只だ陰陽無き地の如きは、作麼生か箇の消息を通せん」と。又た卓すること一下して云く、「昨夜、虚空に芽孽を生ず」と。

貞和四年はまさに邵元が帰国した翌年に当たっているから、おそらく邵元は貞和三年に帰国した後、貞和四年には上洛して天龍寺の疎石を訪ね、その信認を得て冬安居の首座に拝請されたものである。冬安居とは正規の夏安居とは別に一〇月一六日から翌年の正月一五日まで行なわれる冬期の九旬安居のことであるから、邵元は少なくとも貞和四年の一〇月から貞和五年の一月までは天龍寺の疎石のもとに留まっていたことになる。あるいは邵元の帰国上洛を聞き知った疎石の方から積極的に邵元に対して勧誘の書状などが齎されたものかも知れない。貞和四年の冬至には邵元が首座として兼弘しているが、ときに書記は無際弥浩、後堂は平山善均、藏主は鑑溪周察がそれぞれ勤めている。弥浩・善均・周察の三人はともに疎石の法を嗣いだ高弟であることから、そんな中で他派のしかも帰国まもない邵元

が首座に招かれているのは特例といつてよからう。邵元は一陽來復の冬至の日にちなべて「仰山叉手進前」の古則公案を拈提し、春の兆しの中に仏道修行の消息を織りまぜている。

ところで、問題なのは『夢窓国師会下乗弘法語』において、如何なる理由によるものか「邵元」ではなく「契源」の法諱が使用されていることである。契源とはすでに触れたごとく邵元がその参学期の最初に曹洞宗宏智派の東明慧日に参じた折りに慧日より安名された法諱である。いったい、契源の法諱がこの時期に用いられた背景には何が存したのであろうか。邵元が自ら宏智派時代の契源という法諱を故意に使用したもののなか、あるいは積極的に使用したもののなか、それとも編者の中本が不用意に邵元の旧名を使用したものなのかは定かでない。

ただ、この時期の邵元は帰国早々のことでもあり、今後、かつての縁故から聖一派に留まるべきか、古巢の曹洞宗宏智派に属するべきか、あるいは首座に招いてくれた夢窓疎石の恩に報いて夢窓派に転ずるべきか、いまだ自身で決着していなかったのではなからうか。邵元にとってはおそらく息庵義謙との関わりから中国の北地曹洞の流れに属することすら可能であったはずで、それらの選択肢の何れを選ぶのかも本人の自由な意志に任されていたのではなからう

か。邵元という法諱はあくまで在元中の改名であつたのではないかと見られ、いまだ日本禅林では正式には通用していなかったとも解されることから、あえて旧名である契源の法諱をそのままに著名したのかも知れない。

すでにかつての参師であつた宏智派の東明慧日も、また聖一派の南山土雲や双峰宗源も、ともに邵元の帰国する遙か以前に遷化していたわけであり、その意味では邵元が自らの自由な意志によつて誰を本師として選択し、その禅者に対して嗣承香を炷くことも可能な状況にあつたものと見られる。

山城大聖寺への出世開堂

古源…衆議出_二世大聖_一、嗣_二双峯源_一。
扶桑…貞和間、出_二世於大聖_一、一香嗣_二双峰_一。
延宝…貞和三年、出_二世京之大聖_一。
本朝…貞和三年、住_二洛之大聖_一、一香供_二双峰_一。

天龍寺の疎石の席下で首座を勤めて間もなく、邵元は疎石のもとを辞しているものらしい。「古源和尚伝」によれば、年時は欠くものの「衆議にて大聖に出世し、双峯源に嗣ぐ」と記されており、燈史・僧伝でも邵元が京都の大聖寺に出世して「一香を双峰に供つ」と伝えられている。聖一派では衆議をなして邵元を山城（京都府）の正法山大聖

禪寺に開堂出世せしめており、その際に邵元は双峰宗源に嗣承香を炷いて正式に聖一派桂昌門派の禅僧として活動することを世間に表明している。そもそも「古源和尚伝」が「衆議」という不可解な表現を用いているのは何を意味するのであろうか。衆議とは多くの人々たちによる議論なり相談のことであるから、邵元は本人の意思を曲げて何らかの評議の場に身を委ねたことにならう。おそらく聖一派ないし桂昌門派としては邵元をあくまで同派内に留めておきたかったわけであり、派内でそれを決定すべく評議し、邵元に対して亡き宗源が開山始祖となっている大聖寺へ開堂出世すべきことを迫ったものではなからうか。邵元としても強硬な聖一派の人々の説得に対し、夢窓派や宏智派との関わりを断つて、やむなくこれを受諾せざるを得なかったものと解される。

当時、派を転ずることが大問題となった例として、大憲派の中巖円月(中正子・仏種賢濟禅師、一三〇〇—一三七五)の事跡が挙げられる。円月はもともと邵元と同じく宏智派の東明慧日の門人であったが、開堂出世するに際して元国で参学した大憲派の東陽徳輝(一三五五)に嗣承香を炷いたため、宏智派の人々から非難と排撃を受けることになったとされる。

ところで、『扶桑五山記』二「日本禅院諸山座位次第事」

「諸山」の「五畿内」「山城州」の項によれば「京城正法山大聖禅寺、開山、双峯末上」とあり、京都の九条東にあつた大聖寺が山城国の諸山に列する禅寺として、双峰宗源を開山に仰いでいたことを伝えている。ちなみにこの点は「双峯国師年譜書」においても、

元亨元年辛酉 五十七歳(中略)李邵親王、屢詣師之室、叩入道之要。師授以話頭、機語投契。師付伽梨以証之。親王捨洛東后妃之故宮、構禅苑。山曰正法、寺曰大聖、勅陞官寺、邀師為開山祖。正中二年甲子 六十三歳、大聖開堂。

とあってさらに詳しい状況が知られる。ここに名が挙げられている李邵親王とは龜山法皇(金剛源・禅林寺殿、一二四九—一三〇五)の皇子である恒明親王(常磐井宮、一三〇三—一三五二)のことを指している。これによれば、恒明親王はしばしば宗源の室に到って参禅入道の要旨を問ひ、古則公案(話頭)を授けられて参究に努めていたが、元亨元年(一二三二)について機縁が契い、宗源より僧伽梨衣すなわち大衣の袈裟を付与されている。これを喜んだ恒明親王は洛東に存した后妃の故宮を禅苑に改め、正法山大聖禅寺を建立して宗源を開山祖師に迎えているわけである。ただし、宗源が実際に大聖寺の住持として開堂したのは、それから数年を経た正中二年(一二三五)のことであつたとされる。

おそらく邵元はかつて参学時代に宗源に随つてこの大聖寺に掛搭していたことも存したはずであり、いわば入元以前からのゆかりの禅寺に招かれたことになる。すでに述べたごとく邵元は在元中に嵩山少林寺の息庵義謙の道行碑を撰する際に但馬（兵庫県）の正法寺という禅寺の住持名を使用していたわけであるが、それはこの正法山大聖寺の持つ印象が大きかつたためかも知れない。

ちなみに『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』によれば、邵元が大聖寺に開堂したのを帰国した貞和三年のことであると記している。しかし、この点は「古源和尚伝」では年時を伝えず、『扶桑禅林僧宝伝』も単に北朝の貞和年間（一三四五—一三五〇）のできごととするのみである。貞和三年は帰国した直後であり、その後には夢窓下でなした秉弘などを踏まえれば、明らかに年時の混乱によるものと見られ、実際に邵元が大聖寺に開堂したのは貞和五年（南朝の正平四年、一三四九）の頃ではなかつたかと推測される。したがって、邵元が大聖寺に入寺したのは宗源の示寂して後すでに一〇余年の歳月が経過して以降ということになる。

大聖寺に入院開堂することは、帰国まもない邵元自身にとつて、かつて修行したゆかりの故地への回帰であつたとともに、また正式に聖一派の禅者として帰国後の活動を開

始する意志表明でもあつたわけである。しかし、それは一面でそれまで在元中に培つてきた邵元自身の傍宗別派の觀念を超えた自由な業績を、かえつて一定の規格すなわち聖一派といつ一門派の中に限定するものとなつたこともまた事実であろう。それが果たして邵元にとつて自ら願ひ望んだ本意であつたか否かは、今日となつては知る由もない。

ところで、この頃の邵元の活動を伝えるものとして、同じ聖一派の乾峰土曇（広智國師、一一八五—一三六一）が『広智國師語録』（『乾寧和尚語録』とも）巻四「偈頌」において、

古源和尚見寄詞

深怕龍門雲陳高、山堂靜坐聽松濤、忽驚面訓言鋒利、三略又重添二六韜。

という偈頌を残している。土曇は邵元がかつて参じた南山土曇の法嗣であり、すでに入元以前から同参として旧知の仲であつたものと推測される。この偈頌は邵元が何れに在つた時の作かは定かでないが、内容からしていまだ住職する以前の頃かとも見られ、邵元が寄せた韻に土曇が和したものにほかならない。土曇は邵元が寄せた語句の鋭さに驚き、これを「三略六韜」に準えている。『三略』三卷は秦代に張良が黄石公から授けられたといわれる兵法書であり、『六韜』六卷も周の呂尚（太公望）が撰したとされる兵法書のことである。

また同じく、『広智国師語録』巻四「偈頌」には、いま一つ土曇の作として、

寄大聖古源和尚。

再興双径 老円照、福力多合道力少、正法眼開 仏面門、無明劫火不_レ燒燬。

という偈頌も伝えられている。この偈頌は大聖寺に入寺した邵元に対して土曇が寄せたものであり、双径の老円照すなわち南宋末期に杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に住持した無準師範(仏鑑禅師、一一七七—一二四九)の宗風をともに再興せんとする内容であることから、その系統を継ぐ聖一派の一員として活躍することに期待を込めた内容といつてよく、邵元の大聖寺入寺に際して祝賀の偈頌を寄せたものであるろう。当時、土曇は東福寺に住持しており、北朝の貞和四年(南朝の正平三年、一一四八)一〇月より南禅寺に住持していた期間に相当しており、同じ聖一派の禅者として道交を深めていたものと見られる。

ところで、すでに触れたところであるが、国立公文書館(内閣文庫)に所蔵されている『双峰国師語録』には「真讚」として、

又。古源和尚。

国師為_レ師、自為_二国師。龍生_二龍子、鳳産_二鳳兒。
千樹老松今深_レ根固_レ、二株嫩桂今分_レ葉分_レ枝。

又。同。

胸襟虚欲_レ蕩_二乾坤_一、道德巍々称_二至尊_一。
惠日峰頭轟_二霹靂_一、瑞龍山下雨傾盆。

という邵元が本師の双峰宗源のためになした二首の真賛が載せられている。便宜上、この真賛も書き下して示すならば、およそつきのごとくになるろう。

双峰国師の真讚。

古源和尚

国師をば師と為し、自ら国師と為る。龍は龍子を生み、鳳は鳳兒を産む。千樹の老松は根を深め葉を固くし、二株の嫩桂は葉を分ち枝を分かたつ。

双峰国師の真讚。

古源和尚

胸襟は虚にして乾坤を蕩せんと欲し、道德は巍々として至尊と称す。惠日峰頭にて霹靂を轟かし、瑞龍山下にて雨ること傾盆のごとし。

邵元がこれらの真賛を撰した年時などは定かでないが、状況からすると元国から帰国して後のことであることは動かないであろう。宗源が示寂したのは建武二年(一一三五)一月二二日のことであるが、このとき邵元はいまだ在元中に当たり、とても宗源の真賛を記すことなどあり得ない。「双峰国師年譜書」によれば、亡き宗源に対して双峰国師の勅諭号が下賜されたのは北朝の暦応三年(南朝の興国元年、一一四〇)一一月二〇日のことであり、当然、邵元の真賛もその後に撰せられているはずである。おそらくこの二首

の眞實は、帰国した邵元が正式に聖一派の禪者として開堂出世して宗源に嗣承香を炷いた後、宗源の高弟として先師の頂相に付した祖實であったと見るのが自然であろう。

『双峰国師語録』の末尾には邵元の眞實のほかに松源派の月江正印（松月翁・仏心普鑑禪師、一二六七？）と聖一派の大道一以の眞實が載せられているが、明州（浙江省）鄞県の阿育王山広利禪寺の前住であった正印は元の至正四年（一二三四）に日本から到った藏主の雪竇源光のために宗源の眞實を撰している。邵元も帰国して後に本師の宗源の頂相に實を付しているものと見られ、その時期はおそらく邵元が正式に聖一派の禪者として大聖寺に住持していた期間か、後に本山である東福寺に陞住したときのことと見るのが妥当であろう。¹⁸⁾

第一首の眞實では邵元は、円爾と宗源が師資ともに国師となり、その仏法がしだいに根を下ろし枝葉を広げている状況を詠っている。また第二首の眞實では邵元は、宗源がその高德から慧日山東福寺や瑞龍山太平興国南禪寺に陞住して棒喝を用いた厳格な化導を敷いたことを称えている。いづれにせよ、邵元のなした眞實が『双峰国師語録』の末尾に収められている事実は、帰国直後の邵元の能筆と文才が広く京都禅林に評価されていた証しといつてよい。このとき実際に邵元が實を付した宗源の頂相二軸はともに残念

ながら今日に伝えられていないようであり、その散逸は誠に惜しまれてならない。

山城等持寺への入寺

古源…幕府請住…等持。
扶桑…既而幕府請住…等持寺。
延宝…移…等持。（播之法雲）。
本朝…次移…等持。（東福）。

「古源和尚伝」と『扶桑禅林僧宝伝』によれば、その後、邵元は足利幕府の請によって山城の鳳凰山等持禪寺に陞住していることが知られる。当時の征夷大將軍は初代の足利尊氏であり、等持寺は足利將軍家の菩提所として機能していたことから、邵元は幕府の公帖を得て等持寺に入院していることになる。ちなみに等持寺に関しては、『扶桑五山記』二「日本禅院諸山座位次第事」の「十刹位次」の最初に、

等持寺。京師、開山夢窓国師、旧号「鳳凰山」。義堂和尚住持時、去此号。妥帖菴・開山塔・聽雨・聚星・清晏齋・故御所・宝雲閣・観音殿・宗鏡堂・八講堂。

と記されている。京都三条坊門万里小路に存した等持寺は、はじめ足利直義（三条殿、一三〇六—一三五二）が入元僧で幻住派の古先印元（正宗広智禪師、一二九五—一三七四）を開

山始祖に招いて開創したものであるが、後にかつて邵元が帰国直後に乗出した際の法導師である夢窓疎石を改めて開山に拝請している。^①ところで、古先印元といえはすでに触れたごとく、後世、泰山靈巖寺の恵庵義讓の道行碑を撰した人物に誤認されたことで知られるが、そのゆかりの等持寺に邵元が入院しているのも不思議な縁といつてよい。^②等持寺は後に禅宗十刹の第一位に列したほどの名刹であつて、夢窓派の度弟院のごとく扱われるようになるが、おそらくかつての疎石との関わりなどによって、邵元も等持寺に招かれていたのである^③。ただ、この等持寺については室町末期に廃絶しており、詳しい寺の歴史の変遷が定かでないのが惜しまれる。

そして、この等持寺に住持中の頃と見られるが、邵元は疎石の頂相に対してつぎのごとき像贊を残している。すなわち、福岡県福岡市西区今津の龍起山勝福寺には、

徳重^④襄中、
如葵^⑤之向日、
幸稽^⑥首、
同草^⑦之偃風。
通佛^⑧国嫡派、
扶暨^⑨濟正宗、
垂範^⑩万世、
初建^⑪天龍巨刹、
迴興^⑫大多勝院異、
入定^⑬三會、
遠待^⑭慈氏下生、
還如^⑮摩訶迦葉同。
涅槃^⑯後有大人相、
龜阜^⑰嵯峨半倚空。

夢窓正覚心宗国師肖像。

邵元拝贊。「小方印」「方印」

という贊が付された疎石の頂相一軸が伝えられている。落款は不鮮明ながら小方印一顆はおそらく「邵元」の印であ

り、朱文の方印は「古源」と判読される。剥落している箇所がいくつか存し、文意が読み取れないのが残念であるが、幸いに江戸初期の大徳寺派の江月宗玩(大梁興宗禅師、一五七四—一六四三)が記した禅林墨蹟の鑑定日録である『墨蹟之写』の「元和七辛酉」の項に、

道高^①天下、
徳重^②襄中、
聖君^③願心、
如葵^④之向日、
賢幸^⑤稽首、
同^⑥草之偃風。
疏^⑦通佛^⑧国嫡派、
扶暨^⑨臨濟正宗、
垂範^⑩万世、
初建^⑪天龍巨刹、
迴興^⑫大多勝院異、
入定^⑬三會、
遠待^⑭慈氏下生、
還如^⑮摩訶迦葉同。
涅槃^⑯後有大人相、
龜阜^⑰嵯峨半倚空。

夢窓正覚心宗国師肖像。邵元拝贊。「小方印」「方印」
共二分不明。

という邵元の墨蹟の写しが存している。^⑱さらにこれに宗玩による注記として、

此像^①ハ、今津ノ聖福寺ニ有。此寺夢窓開基ノ処、絶海ノ像モアリ。兆典子筆力如何、贊ナシ。

という記事も付されていることから、不明な個所の字句が解明される。宗玩の注記によれば、この邵元が贊を付した疎石の画像は、一に兆典子すなわち兆殿司の筆になる頂相ではないかとされている。ただ、吉山明兆(兆殿司、?—四三三)は聖一派の大道一以(一二九—一三七〇)の法嗣であるが、明兆筆とするには時代的に問題も残しており、

仮に明光筆の肖像画とすればかなり若いときの作品ということになる。

また宗玩のいう今津の聖福寺とは、筑前今津すなわち福岡市今津浜（西区今津）に存する勝福寺のことであって、博多の聖福寺のごとく記するのは明らかな誤りである。今津の勝福寺は大覚派祖の蘭溪道隆（大覚禪師、一一三三—二七八）を開山とし、夢窓疎石を中興開山に仰ぐ禅寺であつて、⁽²³⁾ 實際に寺内には寺の什宝として、「伝大覚禪師画像」とともにこの「夢窓国師画像」が付属として現存し、ともに重要文化財に指定されている。⁽²⁴⁾ 邵元直筆の贊が現存していること自体きわめて珍しいものであり、しかもこのときにはすでに明確に契源ではなく、邵元という法諱を用いていたことが判明する。

そこで便宜上、邵元の贊語を書き下してみるならば、およそつぎのごとくなる。

道は天下に高く、徳は寰中に重し。聖君は心を願にして、葵の日に向うが如く、賢宰は稽首して、草の風に偃くに同じ。仏国の嫡派を疏通し、臨済の正宗を扶撃す。範を万世に垂れ、天龍の巨剎を扞建し、廻く大多の勝院の異なるを興す。三会に入定して、遠く慈氏の下生を待つこと、還た摩訶の迦葉の如きと同じ。涅槃の後に大人の相有り、龜阜嵯峨、半ば空に倚る。

夢窓正覚心宗国師の肖像。

邵元、拝贊す。

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

像贊の内容としては、朝廷・幕府の帰依を受けた疎石の遺徳を称えるものであり、高峰顯日の高弟として臨済の正宗を興し、天龍寺を開創した点などが語られており、疎石を尊崇する邵元の面目躍如たるものがある。邵元が贊の中で疎石に対して夢窓正覚心宗国師の勅号を用いていることから、この贊は少なくとも北朝の観応二年（南朝の正平六年、一一五二）八月に心宗国師の勅号が疎石に下賜されて以降に撰されたものといふことになり、⁽²⁵⁾ しかも内容からして同年九月三〇日に嵯峨野の靈龜山臨川禅寺の三会院において疎石が示寂した直後のことと見られる。ときに邵元はおそらく疎石ゆかりの等持寺の住持であつて、ために疎石の門下から依頼されてこの像贊を揮毫しているものである。⁽²⁶⁾ 邵元が双峰宗源の法嗣であることを表明した後も、疎石の信任を得ていたことが知られ、邵元が如何に期待された禅者であつたかが偲ばれよう。

東福寺への陞住

古源…又藤丞相、延補…東福処。

扶桑…又藤丞相、延補…東福。

延宝…（再董…東福）。

本朝…次移…（等持）…東福（及播之法雲）。

ついで邵元は藤丞相の延請によって、かつて参学期に学

んだ東福寺の第二五世の住持に遷住することになる。慧日山東福寺は嘉禎二年(一一三六)に開基の九条道家(光明峰寺殿、一一九三—一二五二)によって開創され、開山はいうまでもなく円爾(辨円・聖一國師)である。寺の名の由来として南都の東大寺と興福寺に肖って「東福」の寺号が命名され、延応元年(一一三九)に仏殿が上棟され、建長七年(一二五五)に落慶し、他の諸堂も道家の意志を継いだ一条実経(一一三三—一二八四)によって文永八年(一二七二)に完成している。

円爾は「規範八箇条」を制しているが、その一箇条に東福寺の住持長老は円爾の門派すなわち聖一派のみから選任し、他派からの入院を認めない一流相承制を取るべきことを定めている。⁽²⁾このためその後の東福寺は聖一派の禅者のみで維持されることになり、中世を通じて官寺でありながら十方住持制をとらず、他派の禅者が入院した事例は原則として存しない。邵元が入元する以前の元応元年(一一三九)と、在元中の建武元年(一一三三)に回祿(火災)に遭ったものの、北朝の暦応四年(一一四一)には五山の第四位に列せられ、ついで貞和三年(一一四七)には一条経通(一一二七—一一三五)が仏殿再建を果たしている。

ところで「古源和尚伝」と『扶桑禅林僧宝伝』によれば、邵元は藤丞相の延請によって東福寺に入院したことになっ

ているが、この藤丞相とは年代的に関白左大臣の一条経通のことを指している。一条経通は一条内経(一一九一—一二五)の子息で、正中二年(一一三五)に従三位となり、建武二年(一一三五)二月に内大臣に、建武四年に左大臣に昇り、北朝の暦応元年(南朝の延元三年、一一三八)には関白に補せられて氏長者となっている。暦応四年(康永と改元、一一四三)正月に経通は従一位に進んで関白を辞しているから、邵元と関わりを持って東福寺に招いた頃にはすでに厳密には丞相の地位ではなかったことになろう。⁽³⁾その後、経通は北朝の貞治四年(南朝の正平二〇年、一一六五)三月一日に四九歳で没しており、後芬陀利華院殿と号されている。⁽⁴⁾ちなみに経通の父である内経はかつて東福寺の双峰宗源にしばしば参請して袈裟を授与されていることから、経通と邵元との関わりもそうした先代からの縁故に深く結び付いているのである。⁽⁵⁾

『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禅寺」の「住持位次」によれば「廿五、古源和尚、諱邵元、嗣「双峰」と載せられており、邵元は確かに東福寺の第二五世に列せられている。この点は、東福寺派の僧伝ともいうべき『本朝僧宝伝』巻上においても、邵元について「嗣法双峰。往東福、為第廿五世」と記されており、やはり同様に第二五世として扱われている。東福寺はいうまでもなく邵元がか

つて土雲や宗源に学んだゆかりの禅寺であり、聖一派の人々にとってはまさに門派の中核となる本山である。その東福寺の住持に迎えられたことは、聖一派として活動していた邵元にとつても感慨深いものが存したであろう⁽³¹⁾。

ちなみに邵元の前住で第二四世であつたのは道山玄晟の法を嗣いだ平田慈均(？一三六四)であり、後住で第二六世となつたのは南山土雲の法を嗣いだ元庵士顔(一二八三—一三五六)にほかならない。慈均が東福寺に入院するのは北朝の貞和六年(觀応と改元、一三五〇)二月十九日のことであるから、邵元の入院はおそらくその翌年の觀応二年(一二五一)の末か文和年間(一二五一—一三五六)の初めといふことにならう。士顔は文和元年(一二五一)一月四日に東福寺に入院しているから、このときに邵元の後席を継いで東福寺に法幢を掲げているものと見られる⁽³²⁾。ちなみに士顔は北朝の延文元年(南朝の正平二年、一三五六)七月七日に世寿七四歳で示寂し、東福寺山内の莊嚴庵にて墓塔が建てられている。

ところで、先の乾峰土雲の『広智国師語録』巻二「疏」には、

古源和尚住^一東福^二山門疏^三
昔盧舜恭^三帝位^一、在^二璇璣玉衡^一、今亟相求^三法王^一、用^二著撰圖^一
取^一。五礼公行、拳^二本色住山士^一、一名拈中、発^二本分作家機^一。

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

某、碧浚^一龍淵、幽潛^二鷲嶺、密伝^三双峯真印、遠遊^四中華聖門。宗通説亦通、心正筆能正。副^一親信金湯之遴選、符^二積行塵墨之夙因。爾祖国師、抱^三孫不^レ抱^レ子、光明筆寺、党^四理不^レ党^レ親。青原之鋤斧等持、黄鍾之意匠自得。成^一就一殿功德、現出千礎梵宮。樓閣峻層、看^二百尺之高、簷楹峭拔、聳^三九重之上。談咲追^一還全盛、彈指復^二興旧規。端居丈室、接^三本參^一、且代^二大聖説^一正法、重輝^三慧日、永祝^四台星。

という山門疏が伝えられている。まさに邵元が東福寺に入院するのの際して、同じ聖一派の土雲が親しくその山門疏を撰しているわけである。とりわけ、土雲は邵元が密に双峰宗源の真印を伝え、遠く中華の聖門に遊んだ事実を強調している。また邵元が宗通説通して心情が正しいのみでなく、詩文にも秀でて能筆であつたことも伝えていふことから、土雲は邵元が元国でなした活動の一端をかなり熟知していたものと見られる。仏陀に代わつて正法を説く意として、「大聖」や「正法」の語が存していることから、正法山大聖寺から東福寺に初住した際のものであることが知られる。

また同じく聖一派の蔵山順空(円鑑禅師、一一三三—一一〇八)の法を嗣いだ大道一以も、『大道和尚語録』(『赤肉団』とも)上巻(乾)の「住凌雷山普門禅寺語録」において、

次^一古源^一 賀^二住山^一、故有^三雷震号^一令見^二新条之句^上。并

見見慧慧茶茶見見采采頌頌

投投我我嘉嘉音音凌凌赤赤霄霄、恰恰如如疑疑始始授授參參寥寥、住持号令自然智、
不不管管無無奈奈与与有有奈奈、

遊遊玄玄圃圃与与縹縹霄霄、歩歩歩歩往往還還吾吾志志寥寥、知知是是慧慧風風吹吹夢夢駢駢、夜
來來茶茶碗碗忽忽抽抽レレ奈奈。

という「古源に次ぐ」と題した邵元の韻に和した二首の偈頌を残している。最初の偈頌は邵元が普門寺住山を賀した偈頌を一以に寄せたのに対して、一以が返礼の和韻を残したものであり、邵元の句には「雷霆号令して新奈を見る」のことが存したとされる。いま一つの偈頌は邵元より茶を恵まれた際に邵元の来頌に和したものである。ちなみに『大道和尚語録』巻下(坤)に付される「前任南禅大道以禅師伝」によれば、

文和二年六月、一条藤丞相、請住普門。普門時荒廢、因有
道道漸漸無無力力撐撐門門戶戶、漏漏屋屋尋尋常常持持傘傘眠眠之之句句。十一月、卷卷レ衣
歸歸于于淡淡之之故故居居。延延文文元元年年正正月月、重重心心二二条条藤藤丞丞相相鈞鈞命命、住
東東福福。

とあることから、一以は北朝の文和二年(南朝の正平八年一三三三)六月にやはり一条経通(一条藤丞相)の請によつて東福寺の西隣に存した凌霄山普門禅寺に住持し、普門寺の興隆に尽力していることが知られる。したがって、邵元と普門寺の一以が相見し得たのは文和二年の六月から一

月までの間に限られることになる。とすれば、これも時期的に見て、邵元が東福寺に初住した間のできごとであつたと推測されるわけである。しかもその後、一旦、一以は郷里である淡路島(兵庫県)の故居に帰隠しているものの、延文元年(一三五六)正月には東福寺に第二八世として陞住している。

当時、東福寺に住持した禅者の中で入元帰国を果たした人としては、第二五世の邵元のほかに、第二四世の平田慈均と第三〇世の無夢一清、さらに第三三世の友山土俵などが知られていることから、この時期、東福寺僧団にはかなりの中国通が揃っていたことになる。

さらに『延宝伝燈録』巻一七「京兆建仁足菴祖麟禅師」の章には、

京兆建仁足菴祖麟禅師、董相之寿福・万寿、後住住雒之建仁。
東福古源元公、製諸山疏勸勸龍云、壁出出荆岑、自有有連城
之之備備、劍埋埋獄戸、時見見射斗之光。其有有本人、初不不銜銜於
世、但以以身徇徇道、自然然性德有有隣。其人、松源派流、桑田
苗裔、緊緊把住住処、蘭溪水涓滴不不漏、輕輕触著著時、無明火臭
烟蓬蓬煇。其道韻也有有古宿風度、其行履也非非今時輩流。既已
出世為為人、何妨妨逢場作作戲、喚醒醒千光祖起起禅定、普請
三世仏仏転転法輪。屋上栖鳥多、喜想丈人之好、簫牙乾鶴噪、
吟望望同盟之甘。

という記載が見られる。これによれば、邵元は大覚派の足庵祖麟（一二七九—一三五四）のために諸山疏を撰していることが知られるのであって、いま便宜上、諸山疏の部分を書き下しに改めてみるならば、およそつぎのごとくなるう。

東福の古源元公、諸山疏を製して駕を勸めて云く、「靈は荊岑より出でて、自ずから連城の備い有り、剣は獄戸に埋まるも、時に射斗の光りを見る。其の本有る人は、初めより世に銜わず、但だ身を以て道に徇い、自然に惟れ徳に隣有り。其の人、松源の派流、桑田の苗裔にして、緊緊として把住する処、蘭溪の水の涓滴は漏れず、輕輕として触著する時、無明の火の臭烟は蓬煇たり。其の道韻や古宿の風度有り、其の行履や今時の輩流に非ず。既已に出世して人の為めにす、何ぞ場に違つて戯を作すを妨げん。千光祖を喚醒して禅定より起こさしめ、三世仏を普請して法輪を転ぜしむ。屋上には栖鳥多く、丈人の好みを喜こび想い、簷牙には乾鶻噪ぎ、同盟の甘きを貯ち望む」と。

大覚派の足庵祖麟が京都の東山建仁禅寺の第三四世に陞住出世するのの際して、東福寺の邵元は諸山疏を製しており、『延宝伝燈録』はその全文を挙げているわけであるが、これは邵元が撰した貴重な資料の一つといつてよい。祖麟は大覚派の桑田道海（智覚禅師、？—一三〇九）の法を嗣いだとも、その高弟の靈巖道昭（もと至昭）の法を嗣いだとも

もされるが、入元して天目山の中峰明本や金陵保寧寺の古林清茂に参じて帰国しており、はじめ相模（神奈川県）鎌倉扇ヶ谷の龜谷山金剛寿福禅寺や京都の九重山万寿禅寺に住し、その後、京都の建仁寺に入院している。ただ、祖麟の建仁寺住持期間はかなり短かったものらしく、北朝の文和三年（一二五四）一月二十七日に世寿六六歳で示寂している。邵元は疏文において祖麟の徳を称え、彼が松源崇嶽無明慧性、蘭溪道隆とつづく松源派（大覚派）の法統を嗣統し、桑田道海の苗裔として古風な風規を有していたことを伝えている。

播磨法雲寺への入寺

古源：処無^レ何、赤松源撰州、以^レ播州法雲、延^レ師住持
扶桑：未^レ幾、有^レ播州法雲之聘。
延宝：次移^二（等持）播之法雲。
本朝：次移^二（等持・東福）及播之法雲。

邵元が東福寺第二五世の住持職に在つたのはそれほど長い期間ではなかったものらしく、「古源和尚伝」によれば、まもなく赤松源撰州すなわち赤松則祐（撰津守、一三二一—一三七一）が播磨（兵庫県）の法雲寺に入院することを請うたため、これに応じて法雲寺の住持に赴いたとされる。

赤松則祐は赤松則村（法雲寺月潭円心居士、一二七七—一三

五〇)の三男であり、はじめ比叡山延曆寺に出家して帥律師妙善と称していたが、建武中興に参加し、その後は足利尊氏に帰属している。父の則村や兄の赤松範資(信濃守)?一三五二)が没した後、則祐は赤松氏の総領職と播磨国守護職を継承している。⁽³⁶⁾

播磨の法雲寺は詳しくは金華山法雲昌国禅寺と称し、播磨赤穂の苔縄郷すなわち現今の兵庫県赤穂郡上郡町苔縄の地に存している。深く禅に帰依していた播磨守護の赤松則村が建武四年(一三三七)に創建した禅寺であり、同年七月に開山始祖として一山派の雪村友梅(別法和尚・宝覚真空禅師一二九〇一三六六)を迎えられている。⁽³⁷⁾『扶桑五山記』二「日本禅林諸山座位次第事」の「十刹位次」によれば「法雲寺 播州、金華山、開山雪村禾上」とあるから、寺格としては後に十刹位に列していることが知られる。また『勅諭宝覚真空禅師前住大唐京兆翠微寺後住日本京城東山建仁禅寺雪村大和尚行道記』によれば、

丁丑之歳、干戈平定、播州牧源円心夙願、昇建新寺於赤穂苔縄之郷、而欲選天下有道名宿、為開山住持。藤範秀、以師酬其所問也。乃厚加聘礼迎之。秋七月朔、拜請開山。冬十月望、創建大仏殿、寺名「法雲昌国」、山号「金華」、皆宸染也。

と記され、その開創前後の事情などが知られる。すでに述

べたごとく友梅もまた若くして入元した禅者であり、在元期間が二〇年以上に及んでいる上に、その間、大都に滞在したり、嵩山少林寺に菩提達磨の遺跡を拝しており、鎮州(河北省)の滹陀河畔に臨濟宗祖の臨濟義玄(惠照禅師、?八六六)の遺跡を巡礼するなど、邵元と同じように北地の禅蹟にも多くの足跡を残している。しかも友梅は在元期間の最後には長安(陝西省)の南郊、南五〇里の終南山に存する翠微禅寺(永慶寺とも)の住持にもなっており、元朝より宝覚真空禅師の勅号を賜っている。⁽³⁸⁾

このように友梅は邵元が入元する以前に嵩山少林寺などに到っていることから、北地の曹洞禅者と直接の交流を持ち得た初期の日本僧ということになるうか。まさに友梅と邵元はその時期こそ若干は相違するものの、ともに北地の禅宗界の動静をその目で確かめ得た数少ない入元僧であったわけであり、そんな縁故から邵元はすでに亡き友梅が開創した法雲寺に住持として招かれているのではなからうか。

法雲寺は暦応二年(一三三九)一月一四日に播磨禅院の筆頭として諸山に列しており、住持は開山友梅の門徒(一山派)に限らず、広く十方より有徳の人材を住持に招聘する十方住持制を採用している。⁽³⁹⁾邵元が法雲寺に入院したのが何時なのかは具体的には語られていないが、おそらく

則祐が赤松氏の総領職を継承した直後のことであろう。法雲寺は後に応永二三年（一四一六）には十刹位にまで昇格しており、赤松氏の菩提寺として隆盛したことが伝えられている。⁽⁴⁰⁾後世、赤松氏の滅亡とともに寺運が衰微し、往時の姿こそ薄れたものの臨濟宗相国寺派に属して現今に及んでいる。⁽⁴¹⁾

当時、播磨・備前の守護であった赤松則祐は父の則村と同様に禅に親しんで禅僧との関わりが深く、自身も貞和元年（一二四五）に雪村友梅を勧請開山に招いて備前（岡山県）新田莊中山の地に赤松山宝林永昌禅寺を草創しており、文和四年（一二三五）春に伽藍を播磨の佐用莊赤松の里すなわち上郡河野原に移転しており、九月に宝林寺は諸山に列せられている。則祐の法号は宝林寺自天妙善居士であり、後に宝林寺は北朝の永徳三年（南朝の弘和三年、一三三三）五月には十刹位に昇格している。ただし、宝林寺も赤松氏の衰亡とともに荒廢し、後に東寺真言宗に転宗して現今に及んでいる。⁽⁴²⁾

ちなみに中世後期の編集と見られる東京大学史料編纂所所蔵『続芳集』一卷に「閑侍者詩序」が載せられている⁽⁴³⁾が、そこには「東福聖一 南禅双峯宗源 東福古源邵元作也。南泉菴開山、作「諸偈類要序」人也」として、

閑侍者雪村高弟也、一日袖軸來曰、先師没塔于播之金華、

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

今欲去礼而諸友以偈送、請著語於其首以為証。予曰、拜塔礼也、送偈義也、礼之与義、人倫之大本乎又未。師資之道非尋常事也。師道高故、資礼亦動矣。云云。昔雪村転藏於道場、則喪尽伏虎千歲家業、董席於翠微、則睹却長安一城人眼。故名馳中華、販來属住名藍、大開新刹。故道振扶桑、侍其巾瓶者、皆麟角鳳毛也、出其炉鞴者、皆鉄眼銅睛也。誠叔運大宗匠也。予居雪嶠時、翁自湖入閩、不到峯頂、直至商船而販、故不得會悟。及乎予東販、翁又西邁已三周矣。何其縁淺如此耶。回覽此軸、聊述不遇之懷。若到塔下、為予語一遍大円鏡裡、想必點頭。

という邵元が撰した簡略な序文が載せられている。便宜上、邵元の「閑侍者詩序」を書き下してみると、およそつぎのごとくなる。

閑侍者は雪村の高弟なり、一日、軸を袖にして来たりて曰く、「先師没して播の金華に塔す。今、去きて礼せんと欲するに、諸友、偈を以て送る。請う、其の首に著語して以て証と為したまえ」と。予曰く、「塔を拝するは礼なり、偈を送るは義なり、礼と義とは、人倫の大本なるか又た未し。師資の道は尋常の事に非ざるなり。師の道、高きが故に、資の礼も亦た動むるなり」と。云々。昔、雪村、蔵を道場に転じて、則ち伏虎千歳の家業を喪尽し、席を翠微に董して、則ち長安一城の人眼を睹却す。故に名は中華に馳せ、販り来たりて属しは名藍に住し、大いに新刹を開く。故に道は扶桑に振り、其の

巾瓶に侍する者、皆な鱗角・鳳毛なり、其の炉轡より出づる者、皆な鉄眼・銅睛なり。誠に叔運の大宗匠なり。予、雪嶠に居する時、翁、瀬より閩に入るも、峯頂に到らずして、直に商船に至りて販る、故に会悟するを得ず。予の東販するに及んで、翁又た西適して已に三周なり。何ぞ其れ縁の浅きこと此の如きや。此の軸を回覽して、聊か不遇の懐いを述ぶ。若し塔下に到らば、予が為めに一遍の大円鏡裡を誦せよ、想えは必ず點頭せん。

この序文は状況からすると、邵元が法雲寺に赴く以前の消息であり、また法雲寺に住持する因縁ともなつたと見られる事跡を伝えており、おそらく東福寺の住持であつた頃の作であろう。

ある日、雪村友梅の高弟であつた閑侍者という禪者が一軸の詩編を持參して邵元のもとを訪ね、詩軸に序文を付すべきことを依頼している。玉村竹二『五山禅林宗派図』によれば、雪村友梅の門人に良閑という禪者が挙げられているから、この人が閑侍者に相当するものと見られるが、良閑が如何なる経歴の禪者なのか、後に何れかの禪寺で住持職を勤めたのか否かなど、その消息については全く定かでない。良閑は播磨の法雲寺に存した友梅の墓塔に詣でて師恩に酬いようと発案し、これに同調した道友らが詩偈を寄せて良閑に餞別として一軸を贈つたとされる。その軸装の一軸を袖に抱えて邵元のもとを訪ねた良閑は、邵元に対し

て詩軸の冒頭に序文を求めたわけである。邵元は師資の礼儀に厚い良閑の申し出に快く応じて序文を記している。興味深いのは序文の中で邵元が友梅の中国での足跡を記している点であつて、そこには在元中の邵元と友梅のすれ違ひの事情が窺えて興味深い。

邵元が嘉暦二年(一三三七)に入元して福州侯官県の雪峰山崇聖禪寺において樵隱悟遠の席下に在つた頃、友梅は久しい在元期間を終えて浙江から福建の福州閩県にやつて来たものの、近隣の雪峰山には上らず、そのまま商船に乗つて日本に帰国してしまつたとされる。このため邵元は友梅とはすれ違ひの格好となり、互いに会つて語り合つことができなかつたことを述懐している。しかも邵元が日本に帰国し京都に赴いてみると、友梅はすでに北朝の貞和二年(南朝の興国七年・正平元年、一三四六)二月二日に世寿五七歳で示寂しており、西方浄土に往生して三年が経過していたとあるから、結局のところ邵元は友梅と知り合つことがなかつたものらしい。邵元は友梅との因縁がきわめて薄かつたことを嘆いているが、かねてから友梅の人となりに畏敬の念を懐いていたことから、良閑が友梅ゆかりの偈軸に序文を請うたのにも快く応じたものと見られる。邵元が友梅開山の法雲寺に住持する因由の一つに、この「閑侍者詩序」を撰じたことが何らかの機縁となつているのかも知

れない。

このように邵元と友梅は生前の因縁こそ薄かったものの、おそらく邵元は在元中より随所で友梅の活躍のさまを耳にする機会に恵まれていたものと見られる。友梅は邵元に先んじて黄河流域にまで赴き、嵩山の少林寺や法王寺などにその足跡を残しているのであって、邵元にとつて最もともに語り合うことのできる人物の一人ではなかったか。そんな友梅の墓塔の存する法雲寺に化導を敷くことができた事実にも、おそらく邵元は不思議な機縁を感じずには居れなかつたはずである。

東福寺への再住

古源：藤丞相慕師、再住東福。

扶桑：及再住東福。

延宝：再董東福。

本朝：丞相藤公請、再住東福。

その後、「古源和尚伝」や『本朝高僧伝』によれば、藤丞相（丞相藤公）すなわち一条経通が邵元の道徳を敬慕すること止み難く、再び邵元を拜請して東福寺に住持せしめたとされ、『扶桑禅林僧宝伝』や『延宝伝燈録』においても等しく邵元が東福寺に再住した事実を伝えている。邵元が東福寺に再住した年時については定かでないが、定山祖

禪（普応円融禪師、？一三七四）が東福寺の第二七世に入院するのが文和年間（一三五二—一三五六）のことであり、⁽⁴⁵⁾さらに第二八世の大道一以も邵元と同じく一条経通の請によつて延文元年（文和五年、一三五六）正月に東福寺に入院していることから、邵元の再住はこれより後のことであつたものと見られる。東福寺第三〇世である無夢一清は延文四年四月五日に入院していることが知られるが、⁽⁴⁶⁾まもなく退院していることから、邵元の東福寺再住はこの一清の退院直後のことであつたと推測される。

この間、邵元は聖一派の固山一叟（初名は無中冲虚、一一八四—一一六〇）のために祭文を撰しており、「固山叟和尚行状」には一叟の末後の消息として、

延文五年庚子、七十七、正月十九日示微恙。（中略）至二月十二日、病益異常。侍僧之遺偈。索筆書曰、來時空手、去時赤脚、一去一來、單重交折。擲筆吉祥而坐化。実延文五年二月十二日亥刻也。侍僧任遺戒、埋藏巴鑑塔之左辺矣。于時東福長老古源和上、听訃不_レ耐悲、難_レ厚平生之道義_レ遺_レ遺命。祭文曰、

維延文五年歲次庚子二月己未朔十二日、前住天龍固山和上大禪師、示寂於永明院正光之庵。越十四日、東福禪寺住持比丘某、謹以_レ蘋蘩之奠、昭告_レ于尊靈曰、巴鑑之道、源遠流長、式_レ東越_レ西、枝派汪洋。克家之子、最多_レ賢良、別浦清溪、鳳舞鸞翔。難_レ兄難_レ弟、月江字堂、情哉曇翁、

不_レ振而亡。書宿已喪、門戸淒涼、偉哉老師、焯々煌々。雖_レ後_二諸兄_一、道_一最員、回_二一瀾柱_一、屹立中央。大振_二祖風_一、四座道場、為_二己節儉_一、臨_二衆覽_一。再住_二此山_一、整頓_二類綱_一。能事已畢、退_二葺閑房_一、杜_二門_一(燕居、望高_二諸方_一、年邁_二縱_一心、余有_二七霜_一。忽聞_二示疾_一、令我倉皇。經_二趨床下_一、欽語琅々、瞻_二彼容止_一、將謂安康。吾禱久矣、却見_二不祥_一、意折心摧、百斷_二肝腸_一。嗚呼、惠日傾斜_二兮_一、祖庭就荒、禪河枯竭_二兮_一、類綱難_レ揚、法門寥々_二兮_一、哀声痛傷、竹雨蕭々_二兮_一、泪痕淋漓。聊_二屬_一薄奠、今_二抔茗炉_一、香、礼雖_二不_一、腆_二膾_一義其敢忘。尚冀_二

という記事が伝えられている。一聲は東福寺第六世の蔵山順空(円鑑禪師、一一三三—一一三〇八)の法嗣であつて、東福寺の第二二世を勤めて後、嵯峨野の靈龜山天龍寶聖禪寺の第四世となつており、晩年は東福寺山内に営構した寿塔正光庵(祥光庵のこと)に退閑して終焉の計をなしていたとされる。いま便宜上、邵元が一聲のために撰した祭文の部分を書き下してみるならば、およそつぎのことくにならう。

維_レ延文五年歲次庚子、二月己未、朔十二日、前往天龍固山和上大禪師、永明院正光の庵に示寂す。越えて十四日、東福禪寺住持比丘某、謹んで蘋蘩の奠を以て、昭らかに尊靈に告げて曰く、円鑑の道、源は遠く流れは長し、東を式い西を越え、枝派は汪洋たり。克家の子、最も賢良多し、別浦の清深、鳳は舞い鸞は翔ぶ。兄たり難く弟たり難し、月江・字堂、情

なるかな曇翁、振わずして亡ぶ。書宿は已に喪く、門戸は淒涼たり、偉なるかな老師、焯々煌々たり。諸兄に後ると雖も、道_一は最も昌んにして、一瀾の柱を回らし、中央に屹立す。大いに祖風を振り、四たび道場に座し、己の爲めには節儉し、衆に臨んでは寛量たり。再び此の山に住し、類綱を整頓す。能事已に畢わりて、閑房に退蔵し、門を杜して(燕居し、望れは諸方に高く、年邁きて心を縱いままにし、余すに七霜有り。忽ち_二疾を示す_一(と聞き)、我れをして倉皇せしむ。床下に經趨し、欽け語ること琅々たり、彼の容止を瞻るに、將謂らく安康なりと。吾れ禱ること久しきに、却て不祥に見い、意は折れ心は摧き、百たびも肝腸を断つ。嗚呼、惠日は傾斜して祖庭は荒に就き、禪河は枯竭して類綱は揚げ難し、法門は寥々として哀声は痛傷たり、竹雨は蕭々として泪痕は淋漓たり。聊か薄奠を薦めて茗を抔め香を炉き、礼は腆からずと雖も、義は其れ敢て忘れんや。尚わくは饗けたまえ。

「固山葺和尚行状」によれば、北朝の延文五年(南朝の正平五年、一三六〇)二月二日に一聲が世寿七七歳で永明院の正光庵にて示寂した際、東福寺現住であつた邵元はその知らせを受けて悲嘆することこの上ないものが存したとされ、ために越えて一四日には一聲の靈前に祭文を撰して奉安しているわけである。一聲が東福寺再住を終えて隱閑した後、疾を示して病床に伏した際、邵元は一聲のもとを訪ねて見舞い、その後、一聲の訃報を知つて断腸の思いに浸っている。平生の道義が厚かつたというから、両者の

道交がきわめて親密であつたことが窺われ、邵元の祭文のほぼ全文が一輩の「固山輩和尚行狀」に残されている点で貴重な史料といつてよい。

この点は、邵元の遠孫に当たたる太極蔵主聖淋が著した『碧山日録』の「長祿三年二月」の箇所において、

十一日戊子、(中略)明日之祥光之祖固山和尚一百年之遠諱也。

此日、大衆詣其塔下、調經、又於潮音堂有誦呪之行。入夜、与七沢拜祥光之塔也。

十二日己丑、大方之老宿、於潮音堂而有誦經也。而就永明院及祥光、有大齋会也。予遇祥光之宿衲、問師之美父、

一日、師与天龍國師甚善、(中略)又曰、師示寂之夜、乾峰和尚夢問師曰、如何是透法身句。師拳身於空中。覺後、乾

峰知師之去世、乃使侍僧問焉。門人果報曰、吾師刻前遷化也、急歸報之。乾峰乃賦悼偈、贈之汝祖古源。源俛諸

老和之、竟自跋其後曰、至無夢域者之夢非夢也、以其夢、竟無二致故也。

という記事が見い出せる。これは一輩が示寂して一〇〇回忌の法要が長祿三年(一四五九)二月に東福寺山内の祥光庵において挙行された際の記事であるが、その中で祥光庵の門徒の一老衲が太極聖淋に語る逸話のかたちで邵元に関する記事が存するわけである。この記載によれば、一輩が示寂する夜に、やはり聖一派の乾峰土曇が一輩のことを夢に見たとされる。土曇が夢の中で一輩に「如何なるか是れ

透法身の句」と尋ねると、一輩はその身を空中に上げて飛び去つたという。夢から覚めた土曇は一輩の臨終を予知し、侍者に状況を調べさせると、果たして一輩が遷化したという訃報に接している。そこで土曇は一輩を追悼する偈頌を賦し、これを一輩と親しかつた邵元に贈っている。このとき東福寺の当住であつた邵元は、この土曇が呈した偈頌に対して諸老に和韻をなさしめ、その後自ら跋文を撰したと伝えられている。実際に邵元がなした跋文の一部として「夢無き域に至る者の夢は夢に非ざるなり、其の夢を以て二致無きを覚るが故なり」という語句が示されている。この跋文の語とされるものは先の祭文には見られないことから、祭文とはまったく別に一輩の示寂を悼む諸老の軸巻のごときものが伝えられていたものと見られ、邵元の跋文を含めてこのときの一輩の示寂を悼む諸老の軸巻が現今に伝えられていないのは誠に惜しまれよう。

さらに積翠軒文庫旧蔵本で東京大学史料編纂所所蔵の『関東諸老遺藁』(『五山文学新集』別巻二に所収)は東陵永瑛(妙応光国憲海慈濟禪師、一一八五—一三六五)や不闍契闍(万休叟、一一〇二—一一三六九)さらに中巖円月ら曹洞宗宏智派ゆかりの作品を収めている点で特徴的な文献であるが、その中に邵元の作として、

頌軸序。

一山国師、受平元帥請、辞補陀席、逾海越漢、遠來本朝、道行閩東久矣。芝山上皇、嚮其道風、詔命屢下、迎請住洛之南禪。一時名卿鉅公、樞衣室中、四海俊衲奇士、輻湊座下。出其門者、皆鳳毛麟角也。乾明無惑老師、即其一也。余初東遊、相見於福山、一笑莫逆、相依者三載、後在瑞鹿、肩摩袂厲者又三載矣。余遊大唐、一別之後、杳無消息三十年矣。孤錫歸來、聞公已瑞世於信之慈雲、屢運相之万寿、而間關千里、無由致敬、只望風快快而已。己亥冬、偶邂逅于怡雲軒下、彼此白首、互歎昔人之非也。縮席話旧、一洗久濁之塵也。坡仙猶勝相逢不相識、形容變尽語音存之句。故為我設歎。歸寺旬餘、一日大山記室來、袖出巨軸云、是繁峰寄無惑之篇也。書年宿德、鳴衆喙、以和其韻、集而成軸、請作序冠于其首。余曰、序者文人才士之事也、非我所能也。山曰、惑翁以其故旧之故、特來求之、豈可得而默乎。於是不能獲已、隨諸老之後、和一首、併記結交之始末、以奉來命云尔。

惠日山主古源邵元書。

という「頌軸序」が収められており、邵元の序文の後に「同跋」として北朝の延文五年(南朝の正平一五年、一一三六〇)の中和節に建長寺前住で七六歳の東陵永瑛が撰した跋文も載せられている。いま便宜上、邵元の「頌軸序」を書き下してみるならば、およそつぎのようになる。

一山国師、平元帥の請を受け、補陀の席を辞して、海を越え

漢を越え、遠く本朝に來たり、道をば閩東に行じて久し。芝山上皇、其の道風に嚮い、詔命、屢しば下し、迎請して洛の南禪に住せしむ。一時の名卿鉅公、衣を室中に樞げ、四海の俊衲奇士、座下に輻湊す。其の門に出づる者、皆な鳳毛麟角なり。乾明の無惑老師は、即ち其の一なり。余、初めて東遊せしとき、福山に相見し、一笑して莫逆たり、相依ること三載、後に瑞鹿に在りて、肩摩袂厲すること又た三載なり。余、大唐に遊び、一別の後、杳として消息無きこと三十年なり。孤錫にて歸來するに、公は已に信の慈雲に瑞世し、屢しば相の万寿に運ると聞きて、間關たること千里、敬を致すに由無し、只だ風を望んで快快たるのみ。己亥の冬、偶たま怡雲軒の下に邂逅し、彼此とも白首にして、互いに昔人の非を歎き、席を縮めて旧きを話し、久濁の塵を一洗せり。坡仙の猶お「相違つて相識らず、形容は變じ尽きて語音存す」の句に勝るがごとし。故らに我が為めに設くるか。寺に歸りて旬餘、一日、大山記室來たり、袖より巨軸を出だして云く、「是れ繁峰の無惑に寄するの篇なり。書年の宿德、衆の喙を鳴らして以て其の韻に和し、集めて軸と成す。請う、序を作りて其の首に冠せんことを」と。余曰く、「序とは文人才士の事なり、我が能くする所に非ざるなり」と。山曰く、「惑翁は其の故旧を以ての故に、特に來たりて之れを求む、豈に得て黙すべけんや」と。是に於て已むを獲ず、諸老の後に隨いて、一首を和し、併せて交わりを結ぶの始末を記し、以て來命を奉じて尔か云う。

惠日山主、古源邵元、書す。

邵元の跋によれば、はじめに一山一寧が来朝した際の因縁と鎌倉・京都禅林における活動について述べられているが、邵元自身が一寧に参学することができたのか否かについては明確に記されていない。一寧はすでに述べたごとく邵元がそれまで住持を勤めた播磨法雲寺の開山である雪村友梅の本師に当たっている。

ついで邵元が一寧の法嗣である無惑良欽とかつて鎌倉禅林の建長寺(巨福山)や円覚寺(瑞鹿山)において修行を共にした旧知の仲であったことが知られ、それより三〇余年を経て延文四年(一一五九)の冬に、邵元は思い掛けず鎌倉長谷の乾明山万寿禅寺の住持でたまたま京都に出向していた良欽と東福寺山内の怡雲軒に邂逅し、互いに過ぎ去った歳月を懐かしんだことが述べられている。その後、さらにまもなく同じ一山派の大山記室すなわち相山良永(初号は大山、一一二九—一三八六)が法叔の良欽の篇に和韻した巨軸を邵元の下に齎したため、これに応じて邵元が序文を寄せているわけである。ときに邵元は自ら「恵日山主」と記していることから、この時期に東福寺に再住していた事実が判明するのである。

これらの記事は東福寺再任期における邵元の足跡を知る上で稀有な史料といつてよく、また年時が明確に知られる点でも貴重であろう。少なくとも延文四年の後半から延文

五年の当時、邵元はいまだ東福寺の住職(再住)として活躍していたことが知られるわけである。

南泉庵への退居

古源…謝寺事、居南泉庵。
扶桑…遂逸老於南泉庵。
延宝…退休南泉庵。
本朝…退休南泉庵。

ところで、『本朝高僧伝』によれば、邵元の章が「京兆南禅寺沙門邵元伝」という表題で掲載されており、あたかも邵元が京都東山の瑞龍山太平興国南禅寺にも住したかのごとき感を受ける。いうまでもなく南禅寺は正応四年(一一九二)に龜山上皇(名は恒仁、一一四九—一一〇五、天皇在位は一一五九—一二七四)が自らの離宮である禅林寺殿を改めて聖一派の無関普門(玄悟・大明国師、一一二二—一一二九)を開山に仰いで開創した禅寺であり、第二世に就いた仏光派の規庵祖円(南院国師、一一六一—一一三三)によって伽藍の造営がなされている。徳治二年(一一三〇七)に準五山に列せられ、元弘四年(建武元年、一一三三—一一三四)には後醍醐天皇によって五山第一に定められ、後に北朝の至徳三年(南朝の元中三年、一一八六)に至って五山之上という最高の寺格に位置付けられている。

南禅寺の開山である無関普門は邵元にとって法系上の法伯に当たり、また本師の双峰宗源が第七世に就き、邵元と関わりの深い夢窓疎石も第九世に就いているから、邵元が南禅寺に陞住したとしても何ら不自然ではない。しかしながら、実際には邵元が京都五山の第一位となっていた南禅寺にまで陞住した形跡が見られないことから、『本朝高僧伝』が「京兆南禅寺沙門」として邵元を扱っているのは一応は誤りとしなければならぬであろう。ただ、あるいは東福寺の再住であった頃の邵元に対して南禅寺から勅住の要請のようなものがあり、それを邵元が病気や老齢その他の理由で辞退するような経由が存したのかも知れない。邵元に対して南禅寺陞住の勅状などが発布されることがあった可能性は存するものの、結局のところ、邵元は南禅寺に入院することはなかったわけである。

その後、邵元は東福寺の住持職の事を謝して退院しており、晩年には東福寺山内に存した師の宗源の塔頭桂昌庵に近接した地に子院として南泉庵を開創し、ここに退隠閑居して終焉の計をなしている。邵元が南泉庵に退居したことは「古源和尚伝」をはじめ燈史・僧伝が等しく伝えている。ちなみに第三一世の雪舟嘉猷がいつ東福寺に入院しているかは定かでないが、つぎの第三二世の友山土俣が幕府の公帖および一条経通の檀那帖を受けて住持として入院したの

は北朝の康安元年(南朝の正平一六年、一三六一)のことであり、邵元と同門に当たる第三三世の洞天源深(一三六四)が示寂するのが貞治三年四月二六日であることなどから、延文六年すなわち康安元年頃には邵元は住持職を退院していたものと見られる。こうした点を考慮すれば、邵元は初住・再住ともに東福寺にはそれほど長い期間にわたって住持したわけではなかったことになる。

しかしながら、『東福寺諸塔頭并十刹諸山略伝』「諸塔頭 廃絶之分」には、

同下(桂昌)南泉庵、文和年中建立。開基東福二十五世古源邵元、貞治三年十一月十一日寂。嗣法双峯。

と記されていることから、邵元が南泉庵を開創したのは東福寺に再住する以前、南朝の文和年間(一二三二—一二三六)であったらしいことが知られる。したがって、邵元は東福寺に再住する以前に、予め寿塔をまつる南泉庵を開創しているのであって、再住を終えて後に正式に東福寺の東堂(隠居の身)となって南泉庵に余生を養っているわけである。後に示すごとく南泉庵は別に物外軒とも称したようであるが、これらの命名はともに唐代の禅僧で洪州宗(南嶽下)の馬祖道一(大寂禅師、七〇九—七八八)の高弟として名高い南泉普願(王老師、七四八—八三四)が唱導した物外の宗風にちなむものであり、平生、邵元が如何に普願の破格の

禅風に私淑していたかを窺わしめよう。⁵⁹⁾

ところで、建仁寺兩足院には五山版『諸偈類要』、『諸偈撮要』とも七巻が所蔵されており、これは仏家が日用の行事に際して唱える経文中の偈を取り上げ、それについて文字の異同や出典を注し、さらに解釈を付したものである⁶⁰⁾が、その巻首には、

諸偈類要序。

三千威儀、八万細行、乃毗藹事業也。而毘尼篇章、不能具載、但能為人善行方便、則自然契合聖旨也。故華嚴經云、於一切處善用其心、即獲一切善妙功德。善用者何。行不乱行、住不乱住、坐不乱坐、臥不乱臥。凡動靜施為、聞声見色之際、未嘗不発、与大地衆生、同成正覺之心也。所以、諸偈多有「当願衆生之句」、是乃利他為先之意也。然禅苑清規、略載數偈、而偈句文字、差異不等、亦不知何等經教出。晚学初機、亦諳記者少、更有不知不見者、良可歎也。爰有東岡暈侍者、有志於斯久矣。禅寂之餘、博問先知、披檢群籍、搜獵靡遺、或翻譯之新旧、或伝写之舛訛、校讎參訂、無不曲尽、鏤梓印定、以広其伝、未知者令知、未見者令見。其於吾門、豈小補哉。

康安辛丑八月十五日、古源邵元、池陽南泉斷月軒序。

という邵元がなした序文が載せられている。『諸偈類要』の撰述者は大覚派の東岡希泉（希暈とも）であり、この人はほかに『禅林類聚』二五巻や『集洪州黃龍山南禅師書

尺』、『庵和尚語録』などを刊行しており、臨川寺版（五山版の一部）の出版に尽力したことで名高い。⁶¹⁾ 邵元はこの希泉より依頼を受けて康安元年八月一日に序文を撰しているわけである。しかも邵元が「南泉」の庵名を用いていることから、すでにこの時点では東福寺の住持職を退いていたことが判明する。そして、おそらく先に述べたごとく邵元が退住するや、土俵が新しい住持として東福寺に迎えられているのであろう。

いま便宜上、邵元が撰した「諸偈類要序」を書き下してみるならば、およそつぎのごとくなる。

三千の威儀、八万の細行は、乃ち毘藹の事業なり。而して毘尼の篇章、具さに載すること能わず、但だ能く人の為めにする善行方便は、則ち自然に聖旨に契合するなり。故に『華嚴經』に云く、「一切處に於いて善く其の心を用うれば、即ち一切の善妙功德を獲る」と。善く用うるとは何ぞ。行じて行を乱さず、住して住を乱さず、坐して坐を乱さず、臥して臥を乱さず。凡そ動靜施為、聞声見色の際、未だ嘗て発せずして、大地の衆生と与に、同じく正覺を成するの心なり。所以に、諸偈には多く「当に願わくは衆生」の句有り、是れ乃ち「利他を先と為す」の意なり。然して『禅苑清規』に、略して數偈を載せて、偈句の文字、差異等しからず、亦た何等の經教より出だすかを知らず。晚学・初機、亦た諳記せる者少し、更に知らず見ざる者も有り、良に歎くべし。爰に東岡暈侍者

有り、斯に志し有ること久し。禅寂の余、博く問いて先に知り、群籍を披検し、搜し獵りて遺ること靡し、或いは翻訳の新旧、或いは伝写の舛訛、校讎参訂し、曲けて尽さざる無く梓に鑢りて印定し、以て其の伝を広め、未だ知らざる者をして知らしめ、未だ見ざる者をして見せしむ。其れ吾が門に於いて、豈に小補ならんや。

康安辛丑八月十五日、古源邵元、池陽南泉の翫月軒にて序す。

邵元は「池陽南泉の翫月軒」においてこの序を記したことを述べているが、池陽とは唐代に南泉普願が活躍した池州(安徽省)貴池県のことであり、この地にあつて普願は南泉山承恩禅寺を開創して、長沙景岑(岑大蟲)や趙州從諗(真際大師、七七八 八九七)さらに子湖利蹤(神力禅師 八〇〇 八八〇)ら多くの門人を育成している。翫月軒というの馬祖道一の席下において百丈懷海(大智禅師、七四九 八一四)と西堂智蔵(大覺禅師、七三五 八一四)と南泉普願の三大士が明月に因んで自らの心境を吐露した「馬祖翫月」の古則公案に由来するものである。翫月軒とは物外軒の別称とも見られるが、あるいは南泉庵内に物外軒とは別に翫月軒が存していたのかも知れない。そのいずれにせよ、邵元が遠大な普願の禅風に深く心酔していた事実が改めて窺えよう。

さらにこの当時の邵元の消息を伝えるものとして、聖一

派の友山土俵の『友山録』巻上「陞座」に載る「潜溪普円国師三十三周忌辰拈香并陞座」によれば、

恭惟、前南禅田翁大和尚・南泉・少林泊諸大和尚、人天龜鏡、仏祖權衡、大法主盟、一貶人物、是箇門中集大成者也。且抛下鉗斧、袖鞭谷籠象手、聊事安閑、恐是鞞禅排闥入來。定有白在、俯臨座側、為法証明、下情不勝惶懼之至。便下座。以致拜謝、伏乞尊察。

という忌辰拈香が伝えられている。この拈香は土俵が円爾の高弟の一人である潜溪処謙(普円国師、? 一三三〇)の三十三回忌になされたものであり、処謙が示寂したのが元徳二年五月二日であることから、その三十三回忌とは北朝の康安二年(貞治元年、南朝の正平一七年、一三六二)の五月になされているものと見られる。ここにいう前南禅の田翁大和尚とは南禅寺第二五世・東福寺第二四世であつた平田慈均のことであつて、貞治三年(南朝の正平一九年、一三六四)九月一六日に示寂している。南泉はいうまでもなく東福寺第二五世であつた南泉庵開基の邵元のことであり、少林とは東福寺山内の少林庵に退閑した東福寺第二七世であつた定山祖禅のことである。

ときに土俵は東福寺第三二世の現住であり、かつて処謙の席下に連なつた因縁から、処謙の徒に請われて東福寺山内の処謙の塔頭本成寺において陞座説法しているわけであ

り、南泉庵にあつた邵元はこのとき慈均や祖禪とともに同じ聖一派の一員としてこの年回法会に列席していたのである。これも邵元が南泉庵に隠閑した後になした貴重な消息の一つであり、東福寺山内の諸老宿と密接に交流していたことが知られる。

さらに東福寺永明院（現在は末庵の光明院で保管）に所蔵される『明鹿頌軸』一卷一軸にも邵元は跋文を寄せている。『明鹿頌軸』は東福寺の永明院智覺庵開祖である大道一以が、貞治元年の冬に庵内に紛れ込んだ一頭の鹿を飼ひ慣らし、これに明鹿という法名を付与し、またその小屋を九色庵と号したことに因んで、定山祖禪や正堂土頭ら東福寺山内の諸老宿が頌を寄せて成立したものにほかならない。

そして、一以自身が序文を著し、邵元が自筆の跋文を寄せて『明鹿頌軸』と称しているわけである。本文は全巻にわたつて一以の自筆であり、これに邵元が自ら跋文を寄せていることから、邵元の筆蹟としても貴重である。いま、邵元の跋文を示すならば、

機心未忘者、鳥見而高飛、獸見而疾走。識情已泯者、百鳥獻花、群獸來馴。是乃内徳形於外^①者也。故敵陽尊者贊曰、毒惡既忘懐、蛇虎為知己。良有以矣。老樓賢、有二野鹿、避難掃投、不離^②左右、聽^③其指呼、是獸面人心、於斯可見矣。若非^④彼我情、機智泯絶者、焉敢有^⑤如此奇特事乎。

載之方冊、則無愧^⑥敵陽・華林之事迹、又是叢林一段佳話也。遠寄^⑦軸來、俾予跋^⑧。仍書^⑨此、以奉^⑩來命云。重説^⑪偈言。

深林淺草不成^⑫群、占^⑬斷茅庵^⑭獨臥^⑮雲、野性消磨離^⑯怖畏、伴僧寂寂對^⑰斜暎^⑱。

癸卯端午後三日、古源邵元、書^⑲于南泉物外軒^⑳。

「物外」邵元「古源」

というものであり、貞治二年（癸卯）の端午の節句（五月五日）の三日後、すなわち五月八日に南泉庵の物外軒において著されている。便宜上、『明鹿頌軸』に載せられている邵元の跋文を書き下してみれば、およそつぎのごとくなる。

機心未だ忘ぜざる者には、鳥は見て高く飛び、獸は見て疾く走る。識情已に泯する者には、百鳥は花を獻じ、群獸は來たりて馴る。是れ乃ち内徳の外に形わる者なり。故に敵陽尊者は贊して曰く、「毒惡既に忘懐すれば、蛇虎、知己と為る」と。良に以有るか。老樓賢、一の野鹿有り、避難掃投して、左右を離れず、其の指呼を聴く、是れ獸面人心、斯に於いて見るべし。若し彼我の情、機智の泯絶せる者に非ずば、焉んぞ敢て此の如き奇特の事有らんや。之れを方冊に載するは、則ち敵陽・華林の事迹に愧すること無し、又れ是た叢林一段の佳話なり。遠く軸を寄せ來たり、予をして跋せしむ。仍て此れを書し、以て來命を奉じて云う。重ねて偈を説きて言う。

深林には淺草は群を成さず、茅庵を占断して独り雲に臥

す、野性は消磨して怖畏を離れ、伴僧、寂寂として斜
暈に對す。

癸卯端午の後三日、古源邵元、南泉物外軒に書す。

「物外」邵元「古源」

そもそも『明鹿頌軸』からは一頭の鹿をめぐって東福寺
山内の禪者が互いに心和ませている情景が察せられ、当時
の禪林としては一種のユーモアに富んだ作品といつてよ
い。そして、一以(老棲賢)になつた明鹿という鹿を、
邵元はかつて唐代に趙州下の嚴陽善信(嚴陽尊者)が一匹
の蛇と二頭の虎を飼ひ慣らし、自らこれに食を与えていた
故事や、馬祖下の華林善覺が觀世音菩薩の名号を唱えなが
ら大空・小空という二頭の虎を侍者として随えていた故事
に準えているわけである。

また鎌倉の松岡山東慶寺に存する松ヶ岡文庫に所蔵され
る『獅子絃』一巻一軸にも、

卞和三獻荆山壁、不遇知音也是閑、大宝親從海蔵出、
流伝万世照人間。

前東福邵元頓首、字古源、嗣双峰源、源嗣聖一。

という邵元の偈頌が載せられている。この邵元の偈頌も書
き下してみるならばつぎの如くなる。

卞和は三たび獻ず荆山の壁、知音に遇わずば也た是れ閑、大
宝は親しく海蔵より出で、万世に流伝して人間を照らす。

前東福邵元 頓首す。

『獅子絃』一巻は聖一派の虎関師鍊の門人であつた無比
單況の運動により北朝の延文五年(南朝の正平十五年、一三
六〇)六月七日に『元亨釈書』の入蔵が許された際に、師
鍊の門人を中心に総勢五三人の尊宿が賀頌を寄せたもので
あり、出雲(島根県)松江の宝龜山安国円通禅寺の住持で
あつた聖一派の一峰通玄が北朝の永和四年(南朝の天授四年、
一三七八)七月に跋文を撰しているから、その頃に詩軸と
して成立したものと見られる。邵元の肩書きが「前東福」
となつてゐることから、やはり東福寺の住職を退いて南泉
庵に閑居してゐた時期のものであろう。虎関師鍊は邵元が
元から帰国する前年の貞和二年(南朝の興國七年、一三四六)
七月二四日に世寿六九歳で示寂してゐるから、邵元は晩年
の師鍊には相見することはできなかつたことになる。

示寂と後事

古源 貞治三年甲辰夏、示微疾。遂於十一月十一日、書偈曰、
未後一句、始到牢関、擊碎鉄壁、踢倒銀山、阿呵呵。
書訖而化。享年七十。

扶桑 貞治三年仲冬十一日示疾、書偈曰、未後一句、始到牢関、
擊碎鉄壁、踢倒銀山、阿呵呵。擲筆而逝。寿七十。

延宝 貞治三年仲冬十一日寂。辞世偈曰、未後一句、始到牢関、

撃_二碎鉄壁_一、賜_二倒銀山_一、阿_二阿_一阿。寿七十歳。

本朝_一、貞治三年十一月十一日、因_二病書_一、偈曰、末後一句、始到_二牢関_一、撃_二碎鉄壁_一、賜_二倒銀山_一、阿_二阿_一阿。書訖告_二寂_一。世寿七十。

晩年に南泉庵に隠閑した邵元は、おそらくそれまでの忙しい住持職の重責から解放され、しばし悠々自適な東堂生活を送っていたものと推測される。しかしながら、「古源和尚伝」によれば、邵元は北朝の貞治三年（南朝の正平一八年、一二六四）の夏に微疾を示したとされる。この年九月十六日には邵元とも親しかった平田慈均が示寂しており、これを追うかのごとく邵元も微疾を示してより数ヶ月を経て一一月二一日には、

末後の一句、始めて牢関に到る。鉄壁を撃碎し、銀山を賜倒す。阿_二阿_一阿。

という辞世の遺偈を残し、書き終わるや忽ちに示寂したと伝えられる。世寿は七〇歳であったとされるが、法臘については記されていない。微疾を発してから数ヶ月で亡くなっていることから、かなり重い病を得ての最期であったものと推測される。この点は、『本朝僧宝伝』巻上「桂昌派」の「古源」の項においても、

貞治三年甲辰十一月十一日考、十一日、一作「十日」化。

偈曰、末後一句、始到_二牢関_一、撃_二破鉄壁_一、賜_二倒銀山_一。阿_二阿_一阿。

と記されている。その示寂は元国より帰国してわずかに一七年後のことであつて、しかも東堂の身に居していた晩年の歳月を換算するなら、邵元の日本禅林における活動は比較的短期に限られていたことになる。

実のところ、この邵元の遺偈は『景德伝燈録』巻一六「澧州茶普山元安禅師」の章において、唐末の青原下の茶普元安（洛浦とも、八三四—八九八）が語る、「示_レ衆曰、末後一句、始到_二牢関_一、瑣_二断要津_一、不_レ通_二凡聖_一」という示衆を受けるものにほかならない。末後の一句とは臨終時の最期の一句であり、仏法ぎりぎりの端的といった意味ともなる。牢関とは堅牢な関所のことであつて、思量分別を超えた向上の境界を指しており、この関所を通過することを得てこそ、はじめて真の禪者といえる。鉄壁と銀山とは鉄や銀のごとく堅くて削り崩せない峻峻な山や壁のことであり、凡情の分別をもっては到達し得ないありようを意味している。邵元はそれらをすべて崩し倒す勢いで阿々大笑して遷化しているわけである。

ところで、邵元の墓塔は退閑の地であつた東福寺山内の南泉庵に建てられたとされているが、『本朝僧宝伝』巻上においては「塔号_二南泉_一、庵号_二物外_一」と伝えられており、

ここでは南泉塔と物外庵ということになって混乱が見られる。しかし、この点は『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禅寺」の「住持位次」の「古源和尚」の項において、

塔三于南泉菴。頌曰、末後一句、始到三牢関、擊三碎鉄壁、踏三倒銀山。

とあり、同じく「諸塔」の項においても、

南泉菴。古源和尚、邵元、嗣三双峯。頌曰、末後一句、始到三牢関、擊三碎鉄壁、踏三倒銀山。

と記され、さらに『和漢禅刹次第』「慧日山東福禅寺」の「諸塔」の項にも、

廿五 南泉菴。古源和上、諱邵元、嗣三双峯。貞治三、十一月十一日寂。末後一句、始到三牢関、擊三碎鉄壁、踏三倒銀山。

とあることなどから、庵名が南泉庵であったことは動かないであろう。南泉庵が東福寺山内の塔頭の一つとして重きをなしていたことが知られ、おそらく師の双峰宗源の塔頭である桂昌庵の子院のごとき存在であったものと見られる。『本朝僧宝伝』巻上が庵を物外と号したと伝えているのは、別号や軒号を塔頭の庵号のごとくに混同したものである。

ちなみにかつて在元中に邵元とも関わりを持った同じ聖

一派の友山土俵は、『友山録』巻下「偈頌 七言絶句」の中で、

次頌悼三古源和尚一二首。

惠日峰頭三抛三法鼓、隨身干木便逢三場、銀山三踢倒三呵呵笑、鉄樹花開三昨夜霜。

而今三屈三指故人稀、不三哭三南泉三哭三阿誰、一点悲風動三天地、千林葉落三露三山三儂。

という邵元に対する二首の追悼の偈頌を残している。これはおそらく邵元が示寂した直後に、その門人が邵元の遺偈や遺書を持参して土俵に訃報を伝えたときに著されたものである。土俵は邵元の遺偈を巧みに織り込んで、いまは亡き邵元に対して追悼の意を表しているわけである。

土俵は最初の偈頌において、東福寺に法鼓を振り、拄杖を自在に拈弄して接化をなした邵元の在りし日を、手元に届けられた邵元の遺偈に託して偈んでいる。つぎの偈頌にいう「南泉を哭せずして阿誰をか哭せん」という言の中に、かつて在元期間を共にした土俵が道友(故人)の邵元に対する悲痛の念を知ることができよう。

邵元が示寂した後、生前に親交の存した道友が邵元の頂相(肖像画)に眞贊を付している。すなわち、同じ聖一派で東福寺の第四〇世となった夢巖祖応(大智円応禅師、?

一三七四)は、『夢巖和尚語録』「贊」において、

古源和尚贊。

選_レ仏占_レ龍虎榜、出_レ群先_レ鸞鳳鳴、朝_レ歸髮_レ陽谷、夕_レ濯足
兮_レ洞庭、取_レ天風兮_レ歸袂、如_レ衣_レ編兮_レ昼行、炳_レ耀_レ薺兮_レ拜
瞻、挹_レ光_レ舞兮_レ乾城、若_レ夫_レ以_レ法_レ界_レ印、印_レ毛_レ印_レ海、則_レ巫_レ咸
走_レ僧_レ繇_レ驚。

という邵元に対する祖贊を残している。祖応は邵元にとつては法系上の従弟に当たっており、東福寺第一三世の潜深処謙の法嗣であり、五山文学の代表的な詩僧として名高い。祖応の贊の内容は、選仏に努めて出群の機を具えた邵元を称え、その自由奔放な生涯を語るものである。⁽⁷⁶⁾

また夢窓疎石の高弟である義堂周信（空華道人、一三三五—一三八八）も『義堂和尚語録』巻四「真讀」において、

古源邵和尚。

聖_一之胎厥、円照之遺芳、自_レ誓_レ立志、及_レ壯_レ游_レ方、涉_レ万里
鯨_レ涛之峻、入_レ七閩_レ壘_レ壽_レ之郷、過_レ雪_レ嶺_レ而_レ達_レ樵_レ子、跨_レ毬_レ門_レ
以_レ叫_レ曾_レ郎、陵_レ華_レ頂_レ之_レ落落兮、攀_レ天_レ目_レ之_レ蒼蒼兮、度_レ石_レ橋_レ
兮_レ尊者_レ現_レ瑞、登_レ五_レ臺_レ兮_レ大_レ土_レ放_レ光、步_レ少_レ林_レ而_レ衝_レ積_レ雪、
游_レ大_レ都_レ以_レ步_レ康_レ莊、既_レ稅_レ南_レ詢_レ之_レ駕、還_レ回_レ東_レ帰_レ之_レ權、布_レ法
雲_レ兮_レ沛_レ甘_レ露、實_レ慧_レ日_レ兮_レ出_レ樽_レ桑、末_レ後_レ一_レ機、銀_レ山_レ鉄_レ壁、
臨_レ行_レ分_レ布、鞵_レ袋_レ鉢_レ囊、瞻_レ彼_レ南_レ泉_レ之_レ窅_レ堵、頼_レ茲_レ喬_レ木_レ蔭_レ涼、
靈_レ芝_レ燁_レ燁、懶_レ桂_レ昌_レ昌。

という祖贊を残している。ここにいう「古源邵和尚」とは明らかに「古源元和尚」の誤写であるうが、その中で周信

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

は邵元一代の足跡を織りまぜて称贊のことはを述べている。おそらく内容からして邵元の門人らが実際に「古源和尚伝」のごときものを周信に呈示しているものと見られ、これを閲覧した上で周信は邵元の頂相（画像）に対して祖贊を付し、生涯を踏まえた内容を筆にしているわけである。周信のなした真贊は邵元の事跡を知る上でも重要であることから、内容を書き下しておくことにしたい。

聖_一の胎厥、円照の遺芳、誓より志しを立て、壮に及んで游方す。万里鯨涛の峻しきを涉り、七閩壘壽の郷に入り、雪嶺を過ぎて樵子に逢い、毬門に跨りて以て曾郎と叫ぶ。華頂の落落たるを陵え、天目の蒼蒼たるに攀る。石橋を度るに尊者、瑞を現じ、五臺に登るに大土、光を放つ。少林を歩ねて積雪に衝り、大都に遊びて以て康莊を歩む。既に南詢の駕を税き、遽かに東帰の權を回す。法雲に布きて甘露を沛らせ、慧日に實して樽桑を出づ。最後の機、銀山と鉄壁と、行くに臨んで分布す、鞵袋と鉢囊と。彼の南泉の窅堵を瞻め、茲の喬木の蔭涼を頼る。靈芝は燁燁として、懶桂は昌昌たり。

とりわけ、在元中の足跡が明確に辿れることから、周信もまた邵元の元国における活躍のさまを伝え知っていたのであり、その稀有なる行実を称えて余すところがない。おそらく邵元の衣鉢を嗣続した門人らが邵元の行実を撰して、頂相とともに周信に呈し、周信がその内容を踏まえた上で贊を付しているものと見られる。この頂相が伝存して

いれは邵元の生前のすがたが偲ばれたはずであろうが、残念ながら現今に伝えられておらず、散逸していることが誠に惜しまれる。

伊予臨江寺の開山

古源
扶桑
延宝
本朝

ところで、「古源和尚伝」や燈史・僧伝では何らの記載も存していないが、白石虎月(芳瑠)編『東福寺誌』の「貞治三年(正平十九年)」の箇所にはつぎのような興味深い記事が見出せる。

十一月十一日、東福寺二十五世 伊予臨江開山 古源邵元、南泉庵に寂す。

ここでは邵元示寂の年月日を記した際、邵元に対して「伊予臨江開山」という注目すべき注記がなされている。ここにいう伊予(愛媛県)の臨江寺とは、伊予喜多郡下須戒村郷すなわち現今の愛媛県喜多郡長浜町下須戒に存する水照山臨江禅寺のことを指しており、この寺は現在も東福寺派桂昌門派に属して存続している。実際に邵元を開山始祖に拝請している寺院が伊予の地に存する点できわめて注

目すべきものといえよう。白石虎月氏は愛媛県の出身で、喜多郡満穂村(いま内子町石畳甲)の石曇山明光寺の住持を勤める傍ら、日本禅宗史に精通されて『東福寺誌』を編集されており、とりわけ伊予国内の東福寺派桂昌門派に寄せられる思いには一人のものが存している。帰国後の邵元の活動からすれば、ゆかりの開創寺院が一ヶ寺も存しない方が不自然であり、臨江寺が邵元を開山に仰いでいるのは一考の余地が存するであろう。

臨江寺に所蔵される明治一八年(一八八五)に記された『愛媛県伊豫国喜多郡下須戒村臨江寺明細帳』には、「由緒」として、

開基当村大薩之城主橋氏矢野常陸守正秀公、元龜元年三月、堂宇ヲ創立ス。貞治三年甲辰年十月十一日、洛京東福寺塔頭於南泉菴ニ示寂ス、雙峰国師之的の子ニ而、越前国ノ人也、古源元和尚ヲ勸請シテ開山トナス。爾后記録不ニ明白。元禄元年ニ至テ、忠嶽座元中興ス。其后享和二年ニ至テ、金山座元中興ス。文久三年、松菴座元住職中、堂宇全焼。明治十一年ニ至テ、月泉座元 堂宇ヲ再建ス。忠嶽座元ヨリ当今ニ至ル迄、法系相續ス。

と記されている。同じく臨江寺に所蔵されている寛文一〇年(一六七〇)から安永二年(一七七三)に至る『過去帳』には、

当寺開山古源邵元禪師。師諱邵元、桂昌三世、双峰之的子。遊歴宋國、二十有一年、貞治三年甲辰十一月十一日化。元文四年未迄、三百七十五年也。

として邵元を開山とする旨が記されており、同じく『過去帳』には、

当寺開基真正院殿前常州大守実參宗悟大居士。大蔭之城主、橋氏矢野常陸守正秀公。元龜三壬申年四月朔日逝去。正秀先祖者、本國大和州、人皇三十一代敏達天皇四代之正統井手左大臣橘諸兄公之苗裔。和邦依乱世、下着當國、住大蔭之城、道後湯月之城主河野氏之屬、幕下、云云。

と開基檀越の消息を伝えてゐる。これらを通して推測するに、開創してより臨江寺はかなりの変遷を経てゐるものらしい。すなわち、邵元を開山としているものの、その当時の開基檀越や後席を継いだ禪者の世代などは不明である。臨江寺の開基と伝えられるのは大蔭城主の矢野正秀（常陸守・真正院殿実參宗悟大居士、一五七二）であり、このとき伽藍の再興がなされたのであろうが、実際に正秀に招かれて中興開山となつた禪者の名は知られていない。現今の世代で中興開山とされるのは忠嶽祖信（一六九一）という禪者であるが、開基の矢野正秀が没してからすでに一世紀余りを隔てている。こうした点を踏まえると、臨江寺は南北朝期における開山の古源邵元の時代、戦国末期にお

ける開基の矢野正秀の時代、江戸初中期における中興の忠嶽祖信の時代と数度の變遷を経てゐることが知られ、邵元その人の消息はすでに遠く歴史の彼方に散逸してゐるわけである。

現今、臨江寺には開山邵元の墓塔は存していないが、「当寺開山古源元和尚大禪師」と刻まれた高さ五六センチの位牌が本堂に安置されている。ただし、裏面には、

師諱邵元、桂昌三世、双峰之的子。遊歴宋國、二十有一年、貞治三年甲辰十一月十一日戰化。

皆天明五年乙巳冬、

先住全珠首座之以「遺命」而立之。記此

と記されているから、この位牌自体は開創当時の古いものではなく、臨江寺再中興の金山源旨（一八〇四）が先住であつた龍嶺全珠（一七八四）の遺命を受けて天明五年（一七八五）冬に新添し、記録に残してゐるらしい消息が窺われる。しかも臨江寺の末寺で下須戒村柿ノ久保（柿ノ窪）すなわち長浜市柿ノ久保に存する宝鏡山善福寺にも、同じく「当寺開基古源元禪師」と刻まれた位牌がまつられており、裏面には、

師諱邵元、桂昌三世、双峯之的子。遊歴宋國、二十有一年、貞治三年甲辰十一月十一日戰化。

と臨江寺の位牌とほぼ同文の内容が記されている。善福寺

の位牌は何らかの事情でもともと臨江寺にまつられていたものが移管されたのではないかと推測され、その後、天明五年に至って先住全珠の遺金によって新任持の源旨が位牌製作の事業を果たして本堂の祠堂に新たにまつたのが、現今の臨江寺の位牌なのである。

ところで、邵元が臨江寺の開山に拝請されたのが何時なのかは定かでないが、状況からして東福寺の住持として活躍していた頃ではなからうか。あるいは中国より帰国して畿内に向かう邵元がその途中にこの地に立ち寄ることが存したのかも知れない。現今の臨江寺の伽藍は風光明媚な牝川やその支流である大和川に臨む地に建てられており、まさに江に臨む寺というのに相應しい。山号の水照山というのも河川の水に冴える山並みに由来するものである。あたかも唐末に臨済宗祖の臨済義玄(慧照禪師、? 八六六)が鎮州(河北省)の東南、滹陀河に臨む地に伽藍を建て臨済院と名付けた故事を彷彿させるものがある。おそらく邵元存命中の住持、新装成った臨江寺の伽藍は現今に倍して一層すばらしかつたに相違ない。邵元がこの地に錫杖を留めたのは、その雄大な海浜や河川の姿に中国元朝の遙かなる山河を思い浮かべてのことではなかつたかとすら感じられる。

嗣法門人について

ところで、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』などにはまったく触れられていないが、『慧日山東福禪寺宗派図』、『仏祖宗派図』、『正誤仏祖宗派図』などによれば、邵元の法を嗣いだ門人として二人の禅者の名が知られている。すなわち、もっとも詳しい『慧日山東福禪寺宗派図』巻下「桂昌門派」の箇所には、

東福 古源邵元 南泉祖 東福 南源昌説
崇聖 徳海昌輝

として二人の名を挙げている。これに対して、『仏祖宗派図』では、

東福古源邵元 南泉祖 東福南源昌説
とあり、また『正誤仏祖宗派図』四でも、

東福古源邵元 南源昌説

とあるなど、単に南源昌説の名のみを挙げるにすぎない。いずれにせよ、邵元には東福寺の第七一世となった南源昌説(一四〇九)のほかには、わずかに崇聖寺なる禅寺に住した徳海昌輝の存在が知られるわけである。おそらく帰国して以降の邵元の活動が比較的短期に限られていたがために、その間に育成し得た門人の数もかなり限定され

ていたものと推測される。また先の系譜によつて、邵元が自らの得度や嗣法の門人に「昌」の一字を系字として授与していたらしいことが知られる。

そこで、はじめに邵元の第一の法嗣ともいえる南源昌説について触れておきたい。この人に関しては、『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禅寺」の「住持位次」に、

七十一、南源、諱昌説。嗣古源元。応永十六、五月二日寂。南泉、桂昌派。

とあり、また『東福寺誌』「応永十六年」の箇所にも、

応永十六年己丑（中略）五月二日、東福 七十一世 南源昌説、南泉庵に示寂す。（南源和尚伝）師嗣法古源元、後歴運大聖・普門 五十三世。東福三刹、又創南泉庵。応永十六年五月二日、遺偈曰、末後一句、応永十六、畢竟如何、仏祖不識。

という簡略な行実が載せられている。これらによれば、昌説は郷閭や俗姓は伝えられず、邵元との機縁なども知られないものの、邵元に嗣法した後、邵元も住した山城の大聖寺に出世開堂している。もっとも義堂周信の『空華集』巻一〇「七言律」に、

謝説南源赴賀州安国、見留円悟・大憲二祖師語。
寄謝松山新長老、臨岐辱贈欲何如、黄金不換天寧語、
白雲難酬妙喜書。君去匡徒追二老、我衰靡学付三余、

前程万里相期遠、一步殷勤慎最初。

とあるから、昌説は大聖寺に前後してか師翁に当たる双峰宗源を開山に仰ぐ加賀（石川県）の万松路山安国崇聖禅寺にも住持していることが知られる。周信は昌説が加賀の安国寺に赴くのに際し、楊岐派の圓悟克勤（仏果禅師、一〇六三—一一三五）と大憲宗泉（妙喜・普覺禅師、一〇八九—一一六三）にちなむ語句を書いて与えている。ついで昌説は東福寺の西隣に存した十刹位の凌霄山普門禅寺の第五三世となつており、『禅刹住持簿』の「凌霄山普門禅寺」にも「五十三世、南源昌説」と記されている。その後、さらに昌説は師の邵元と同じように東福寺に勅住しており、第七一世の法席を置しているわけである。

昌説は応永一六年（一四〇九）五月二日に示寂したとされるが、その世寿や法臘などは伝えられていない。師の邵元が示寂してよりすでに四五年もの歳月が経過していることから、少なくとも七〇歳前後には達していたものと推測される。また昌説の「末後の一句、応永十六、畢竟、如何ん、仏祖も識らず」という遺偈は、明らかに師の邵元のそれを継承したものにほかならず、昌説が邵元の仏法を忠実に受け継がんとした高弟であったことを改めて窺わしめる。邵元と同じように南泉庵に示寂したことが知られるものの、『東福寺誌』に昌説が南泉庵を創したかの如く記し

ているのは明らかに誤りである。ただ、あるいは邵元の晩年に昌説が中心となつて邵元のために南泉庵創建が図られた事情などを暗に伝えたのかも知れない。

いま一人の法嗣である崇聖の徳海昌輝については、邵元の法を嗣いだ事跡のほかはほとんど知られていない。昌輝が住したとされる崇聖とは、先に示した加賀の万松路山安国崇聖禅寺のことを指しているものと見られ、同門の昌説と前後して昌輝も桂昌門派の一員として師翁の宗源ゆかりの禅刹に活躍していたことが判明する。ただ、加賀の安国崇聖寺がすでに廃寺となっており、その所在地も今日では未詳となつてゐることが惜しまれよう。

ところで、玉村竹二編『五山文学新集』第六巻に載る聖一派の季弘大叔(一四二二—一四八七)の項や、『五山禅僧伝記集成』の「太極」の項などによれば、昌説の系統は、

古源邵元 南源昌説 隆中 太極聖淋

と次第したとされておられ、『碧山日録』の記主である太極蔵主聖淋(一四二二?)が邵元・昌説の法系に連なつてゐることが明らかとなつてゐる。『碧山日録』巻一には、長祿三年(一四五九)の「十一月」の項に、

十日戊子、前板赴_二大聖寺、習_一冬節法会之儀。晚赴_二南泉、拜_一物外祖塔。十一日己丑、物外祖年諱之辰也。設_レ齋請_一同

派之徒。

という記事が存し、また長祿四年(一四六〇)の「正月」の項にも、

十一日己丑、物外祖忌日也。而往_二南泉、以_レ焼香、且致_二歳首之礼於_一倫叔・南柏_一也。

という記事が存するなど、『碧山日録』の随所に南泉の物外祖塔を拜登した記述が見い出せる。南泉庵の物外祖塔とはまさに邵元の墓塔にほかならず、戦国初期においても邵元の塔頭南泉庵では命日などに供養の法会が厳肅に挙行されていたのであり、聖淋のみでなく、倫叔・南柏ら門流の人々が存したことが知られ、南泉庵がなお綿々と維持されていた事実が判明する。

ちなみに室町後期の画僧である雪舟等揚(雲谷軒、一四二〇—一五〇六)が室町後期に画いたとされる「東福寺伽藍圖」には聖一派の了庵桂悟(仏日禪師、一四二五—一五二四)が付した贊ならびに語が載せられているが、そこにも南泉庵についての記述が見られるから、桂悟が贊を付した永正二年(一五〇五)六月の時点でも南泉庵が桂昌庵の子院の一つとして存続していたことが知られる。

このように邵元の法門は法嗣の南源昌説や徳海昌輝によつて受け継がれ、とくに昌説の系統がしばらく維持された

ものの、残念ながら数代で断絶して後世に展開することはなかつたのである。在元中の邵元の活動がきわめて華々しいものであつただけに、これに比するなら門流が短期間に衰微断絶したことは一面で寂しいものがある。

伝えられる上堂語

今日、邵元にはまとまつたがたちでの語録の類は残念ながら何ら伝えられていない。したがつて、邵元が語つた上堂語その他で知られているものも、きわめて限られているのが実情である。ただ、幸いに『延宝伝燈録』にはかなりの紙面を割いて邵元がなした上堂や小參の語を載せているが、これは編者の正元師璽が何らかのかたちで邵元の語録の類を閲覧筆写し得たことを意味するものであろう。以下、『延宝伝燈録』に引用される邵元のことばを紹介し、併せて書き下しを示しておきたい。

すなわち、『延宝伝燈録』の邵元の章には、はじめに天龍寺の夢窓疎石に招かれて前堂首座を勤めた際の「乗弘法語」として、

(1) 冬至乗弘。問答畢乃曰、仰山又手進前、指鹿為馬、香嚴進前又手、証龜作龜。拈拄杖曰、上方木上座、別運神通、全機透脱、直乘造化斡旋之權、能応陰陽窮變之節。卓一下曰、六陰剥。又一下曰、一陽生便見、春入寒梢開柳

眼、梅吐冷蕊、榮氷骨。物々総純真、頭々皆合轍。是則是只如無陰陽地、作麼生通個消息。又卓一下曰、昨夜虚空生芽孽。

冬至の乗弘、問答し畢わりて乃ち曰く、「仰山の又手して進前するは、鹿を指して馬と為す、香嚴の進前して又手するは、龜を証して龜と作す」と。拄杖を拈じて曰く、「上方の木上座、別に神通を逞しくして、全機透脱し、直に造化斡旋の權を乗り、能く陰陽窮變の節に応ず」と。卓すること一下して云く、「六陰、剥がる」と。又た一下して云く、「一陽生じて便ち見る、春は寒梢に入りて柳眼開き、梅は冷蕊を吐いて氷骨榮かなることを。物々は總て純真にして、頭々は皆な合轍す。是なることは則ち是なるも、只だ陰陽無き地の如きは、作麼生が個の消息を通ぜん」と。又た卓すること一下して曰く、「昨夜、虚空に芽孽を生ず」と。

という法語が挙げられている。これはすでに述べたごとく邵元が元国より帰国した直後、諸寺に住持する以前に疎石に招かれて天龍寺の首座として乗弘した際の語句であり、貞和四年（一一四八）の冬至の日になされている。『夢窓国師会下乗弘法語』にはこの乗弘の索話がそのまま収められており、『延宝伝燈録』に載るものとはほぼ同一である。

ついで『延宝伝燈録』には、邵元が諸寺に住持して以降になした上堂・小參その他が載せられている。

(2) 上堂。拈香供「双峯」。拋座曰、軟如「生鉄」、硬似「綿團」。老瞿

曇、三百余会説不明、胡達磨、十万里程蹈不著。転轡轉活鱗、影迹不_レ留、孤迥迥峭巍、突出難_レ辨。拈_二拄杖_一卓一下曰、百維碎_二了也。直得、天回地転、鳳舞鸞翔。瑞氣溢於九重、狼烟静_二於四海。正恁麼時、畢竟功歸_二何処_一。良久曰、天高群象正、海瀾百川朝。

上堂。拈香して双峯に供う。座に拠きて曰く、「軟らかなること生鉄の如く、硬きこと綿団に似たり。老瞿曇、三百余会にても説き明かせず、胡達磨、十万里程にても蹈み着せず。転轡轉、活鱗と_レして、影迹留めず、孤迥迥、峭巍として、突出して弁じ難し」と。拄杖を拈じて卓すること一下して曰く、「百維碎_二了われり。直に得たり、天回り地転じ、鳳舞い鸞翔ふことを。瑞氣は九重に溢れ、狼烟は四海に静かなり。正恁麼の時、畢竟、功は何処に帰せん」と。良久して曰く、「天高くして群象正し、海瀾くして百川朝す」と。

(3) 当晚小參。去来不以_レ象、昔年_二棚載入_一大唐。動静不以_レ心、今日垂_二窠_一。故国大唐、雖然無_レ定相、遇_二縁_一即宗。拈_二拄杖_一曰、拄杖子、二十年來未_レ曾離_二左右。有時洞庭瀟湘、行到水窮處、有時天台雁蕩、坐看雲起時。這辺那辺、応用無_レ缺、収来放去、不_レ受人瞞。因_レ甚_レ卻今日被_二業風吹_一、到_二正法山中_一、無_レ端頂上担_二二百二十斤鉄枷_一。迴避又迴避不_レ得。放下又放下不_レ得。不見_レ道、順是菩提。靠_二拄杖_一。

当晚の小參。「去来は象を以てせず、昔年、棚載にして大唐に入る。動静は心を以てせず、今日、窠を垂れて故国に帰る。故国・大唐、定相無しと雖然も、縁に遇わば即ち宗

く」と。拄杖を拈じて曰く、「拄杖子、二十年來、未だ曾て左右を離れず。有る時は洞庭の瀟湘、行いて到る水の窮まる處、有る時は天台・雁蕩、坐して看る雲の起こる時。這辺・那辺、応用して缺くこと無く、収め来たり放ち去つて、人の瞞を受けず。甚に因つて卻て今日、業風に吹かれ、正法山中に到つて、端無くも頂上に二百二十斤の鉄枷を担うや。迴避するも又た迴避し得ず、放下するも又た放下し得ず。道うことを見ざるや、順うは是れ菩提なりといふを」と。拄杖に靠る。

(2) は開堂拈香して双峰宗源への嗣承を世間に表明した際の拈香法語に当たるものであり、(3) は開堂の日の当晚の小參にほかならず、その中で「正法山中」の語が見られるから、明らかに正法山大聖禅寺にはじめて入寺開堂した際の上堂・小參であることが知られる。とりわけ、注目すべきは、(3) の小參で「拄杖子、二十年來、未だ曾て左右を離れず。有る時は洞庭の瀟湘、行いて到る水の窮まる處、有る時は天台・雁蕩、坐して看る雲の起こる時」という表現が見られることであり、帰国してまもない頃の邵元の心情が窺われるとともに、邵元が在元中に歴遊した地方の消息の一端をも伝えている点で貴重である。この小參によれば、邵元は台州の天台山のみでなく、温州(浙江省)の北雁蕩山に在つて静寂の中に坐禅し、また潭州(湖南省)の洞庭湖にまで行脚し、瀟湘八景をも愛でている。かつて経巡つ

た中国各地の山水の風光を思い起こしている邵元の心情が察せられる。ただ、この当晚小参は、かなり複雑な事情によつて、邵元自身、本人の意志とは裏腹に止むなく大聖寺に開堂出世せざるを得なかつた様子が如実に窺われる点でも注目される。

ついで『延宝伝燈録』には、さらにつぎのとき小参が載せられている。

(4) 冬至小参。道遠乎哉、触事而真、聖遠乎哉、体之則神。庭柏陰森、指示西來祖意、溪梅的皜、漏泄南能家風。昭昭乎浩浩乎、塵塵爾剎剎爾。恁麼会去、則正法住世、亘古亘今、大聖出興、不來不去、不去而去、曷運推遷、陰魔消伏。不來而來、葭灰飛動、陽氣發生。便見、石笋抽条、氷河發焰。拈拄杖曰、拄杖子結一果、黑似漆硬如鉄。不是法昌橘子、亦非洞山果子。覩之者瞎、卻眼睛、喫之者爛、卻舌頭。靠拄杖曰、莫道著、道著二十棒。

冬至の小参。「道とは遠きものかな、事に触れて真なり、聖とは遠きものかな、之れを体すれば則ち神なり。庭の柏は陰森にして、西來の祖意を指示し、溪の梅は的皜にして、南能の家風を漏泄す。昭昭乎たり、浩浩乎たり、塵塵爾り、剎剎爾り。恁麼に会し去らば、則ち正法の住世は、古に亘り今に亘り、大聖の出興は、不來不去なり。不去にして去なれば、曷運は推遷し、陰魔は消伏せん。不來にして來なれば、葭灰は飛動し、陽氣は發生せん。便ち見る、石笋の条を抽んじ、氷河の焰を發することを」と。拄杖を拈じて

曰く、「拄杖子、一枚の果を結び、黒きこと漆に似、硬きこと鉄の如し。是れ法昌の橘子にあらず、亦た洞山の果子に非ず。之れを覩る者は眼睛を瞎卻し、之れを喫する者は舌頭を爛卻す」と。拄杖に靠りて曰く、「道著すること莫かれ、道著すれば三十棒せん」と。

この冬至の小参も「正法」や「大聖」の語が見られることから、やはり大聖寺においてなされたものであることが知られる。邵元は雲門宗の法昌倚遇（一〇〇五—一〇八一）に因む「法昌橘子」の公案や、中国曹洞宗祖の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）に因む「洞山果子」の公案を取り挙げて、陰極陽生の冬至の消息にちなんで仏法のありようを述べている。

(5) 元宵上堂。拈拄子曰、燃燈古仏、在拄子頭、放大光明、遍照三千大千世界。其中有情与無情、触此光者、同証三昧、亦放光明、光光相接、無有間斷。大眾、要知此光起处麼。擊拄子曰、看脚下。

元宵上堂。拈子を拈して曰く、「燃燈古仏、拈子頭に在りて大光明を放ち、遍く三千大千世界を照らす。其の中の有情と無情と、此の光りに触るる者、同じく三昧を証し、亦た光明を放ち、光光相い接し、間断有ること無し。大眾、此の光りの起る處を知らんと要すや」と。拈子を撃ちて曰く、「脚下を看よ」と。

(6) 開爐上堂。竹所無、人訪寂寥、天寒風景、轉蕭条、火星迸出地爐外、南海波斯鼻孔焦。

開爐上堂。「竹所、人の寂寥を訪ぬる無く、天寒の風景、転た蕭条たり、火星は迸り出づ地爐の外、南海の波斯、鼻孔焦く」と。

(7) 至節上堂。夜來門前神塚放_二大光明_一、光中有_二宇賀耶神將_一。合掌稽首説_レ偈云、仲冬書雲節、日南万事吉、舜若多神笑點頭、憍梵盜提驚吐_レ舌。

至節上堂。「夜來、門前の神塚、大光明を放ち、光中に宇賀耶神將有り」と。合掌稽首して偈を説きて云く、「仲冬書雲の節、日は南にありて万事吉たり、舜若多神は笑いて點頭し、憍梵盜提は驚きて舌を吐く」と。

(5) の「元宵上堂」は一月一五日に、(6) の「開爐上堂」は一〇月一日に、(7) の「至節上堂」は仲冬(十一月)書雲すなわち冬至の日にそれぞれなされたものである。この三上堂がいずれの寺でなされたものか定かでないが、おそらく大聖寺が等持寺でなされたものである。(5) においても邵元は拄杖を拈弄しており、在元中から愛用してきた拄杖に對する思い入れの深さが知られる。(7) は門前の神塚に関する内容であり、そこに載る宇賀耶神將とは宇賀神・宇迦神ともいい、農業神すなわち福の神のひとりであり、すべての衆生に福德を授け、菩提へと導くとされている。(8) ところで、これらの上堂で興味深いのは燃燈仏や神塚の宇賀耶神將が大光明を放っているという表現である。邵元が光明を放つことに拘るのは、あるいは在元中の五臺山における

文殊菩薩の靈驗が何らかの影響を及ぼしているのかも知れない。

つぎの(8)は東福寺入寺の際の山門香語であるから、以下の上堂の多くは東福寺でなされたものと推測され、おそらくは初住の際のものである。

(8) 東福入_レ門曰、此門廣大、含_レ容法界、是聖是凡、出入無礙。喝一喝曰、汝等諸人、為什麼_レ在_レ門外。

東福にて門に入りて曰く、「此の門は廣大にして、法界を含容す、是れ聖か是れ凡か、出入すること無礙なり」と。喝すること一喝して曰く、「汝等諸人、什麼と為てか門外に在る」と。

(9) 小參上堂。釈迦掩_二室摩竭_一、緣_レ木求_レ魚、淨名杜_二口毘耶_一、守_レ株待_レ兔、直饒、言前領_レ旨、滯_レ般迷_レ封、句下精通、触_レ途狂見、衲僧家、不_レ著_レ仏求_レ、不_レ著_レ法求_レ、不_レ著_レ僧求_レ、任運騰騰、去來無礙。有時孤峯頂上、目視_レ雲霄。有時古渡頭辺、和泥合水、進_二歩_一、則蹈_二翻香水海_一、不_レ是神通妙用、亦非_二法爾如然_一。且道、為什麼_レ如此。拈_二拄杖_一曰、丈夫自有_二衝天志_一、不_レ向_二如來行処_一行_上。

小參上堂。「釈迦は室を摩竭に掩つ、木に緣りて魚を求む。淨名は口を毘耶に杜す、株を守りて兔を待つ。直饒い、言前に旨を領するも、般に滯り封に迷わば、句下精通するも、途に触れて狂見せん。衲僧家、仏に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、任運騰騰として、去來無礙なれ。有る時は孤峯頂上にて、目は雲霄を視る。有る時

は古渡頭辺にて、和泥合水す。一步を進むれば、則ち香水海を蹈翻す、是れ神通妙用にあらず、亦た法爾如然なるに非ず。且く道え、甚麽と為てか此の如き」と。拄杖を拈じて曰く、「丈夫には自ら衝天の志し有り、如來の行く処に向かつて行かざれ」と。

(10) 上堂。無相法身何処參、無言說法怎生談、前山簇簇花如錦、後澗潺潺水似藍。

上堂。「無相の法身、何処にか參ぜん、無言の說法、怎生にか談ぜん、前山は簇簇として花は錦の如く、後澗は潺潺として水は藍に似たり」と。

(11) 上堂。槐陰日永、殿閣風涼、西來祖意、正好商量。拈拄杖曰、古人道、識得拄杖子、一生參學事畢。諸禪德、還識得麼。扶過斷橋水、伴歸無月村。

上堂。「槐陰の日は永く、殿閣の風は涼し、西來の祖意、正に好し商量する」と。拄杖を拈じて曰く、「古人は道う、『拄杖子を識得せば、一生參學の事畢むる』と。諸禪德、還た識得すや。扶けて斷橋の水を過ぎ、伴いて無月の村に歸る」と。

(12) 中夏謝諸官人并維那上堂。天得中星辰定位、地得中山岳鎮方、聖君得中万邦入貢、將軍得中四夷歸降。群官得中為邦家柱石、為祖道金湯。衲僧得中、悅可衆心、整頓紀綱。且道、九夏得中時如何。良久曰、薰風自南來、殿閣生微涼。

中夏に諸官人並びに維那を謝する上堂。「天は中を得て星辰は位を定め、地は中を得て山岳は方を鎮め、聖君は中を得

て万邦は入貢し、將軍は中を得て四夷は歸降す。群官は中を得て、邦家の柱石と為り、祖道の金湯と為る。衲僧は中を得て、衆心を悦可し、紀綱を整頓す。且らく道え、九夏に中を得る時は如何ん」と。良久して曰く、「薰風は南より來たり、殿閣、微涼を生ず」と。

(8)はおそらく東福寺に初住したときの山門での入寺香語であろうし、(9)もそのときの当晚小參と見られ、何ものにもとらわれない邵元の任運無礙なありようが窺われる。(10)は山水と花々に恵まれた東福寺の風光の中に仏陀の無相の法身や無言の說法を見るものである。また(11)は北宋初期の臨濟禪者である汾陽善昭(無德禪師、九四七—一〇二四)による「汾陽拄杖」の古則に因むものであり、先の(3)などとともに邵元が好んで拄杖を用いて学人接化をなしていたことを示すものである。さらに(12)の中夏(六月一日)の上堂では聖君・將軍・群官のありようを述べるとともに、衲僧の果たすべき修行とは何かが問題とされてあり、朝廷(南北朝)と幕府(足利政権)そして諸侯との関わりの中で腐心する邵元の心情が察せられる。

このように『延宝伝燈録』がかなりの紙面を割いて邵元の上堂・小參を収録しているのに対して、同じ師資による『本朝高僧伝』では、わずかにつぎの二上堂を載せているにすぎない。

(13) 指門曰、此門広大、含容法界、是聖是凡、出入無礙。喝一喝曰、汝等諸人、為什麼在門外。

この(13)は先の(8)の東福寺入寺の際の山門香語にほかならない。

(14) 上堂。我本無心有所希求、今法王大宝自然而至。所以道欲識仏性義、當觀時節因緣、時節既至、其理自彰。直得慧日峰頭嫩桂抽枝、偃月橋邊清風巾地、祖師心印一印印定、古仏家風八字打開。一一靈明天真、物物現成受用。祖道大行王道大統。山蒼蒼、水茫茫。但見皇風成一片、不知何処立封疆。

上堂。我れ本とより心に希求する所有ること無し、今、法王の大宝、自然にして至る。所以に道う、「仏性の義を識らんと欲さば、當に時節因縁を觀すべし、時節既に至れば、其の理、自ずから彰わる」と。直に得たり、慧日峰頭に嫩桂は枝を抽んじ、偃月橋邊に清風は地を巾り、祖師の心印、一印に印定し、古仏の家風、八字に打開することを。一一の靈明の天真、物物、現成受用す。祖道は大いに行なわれ、王道は大いに統まる。山は蒼蒼たり、水は茫茫たり。但だ見る、皇風、一片と成ることを、知らず、何処にか封疆を立てん。

(14)は『延宝伝燈録』には載せられていない上堂であるが、文中に「慧日峰頭」のことが見られることから、やはり慧日山東福寺における上堂であることが判明する。また「今、法王の大宝、自然にして至る」とか「祖道、大いに

行なわれ、王道、大いに統まる」さらに「皇風、一片と成る」などの語句が存し、邵元が南北朝対立の時代にあつて、仏法と王法を並立するものとしてとらえていたことが知られる。あるいは觀応の擾乱で一時期、南北朝が和解した際のものかも知れない。

これら邵元に関する上堂・小參が『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』に収録されていることからして、おそらく邵元には初開堂以降の上堂語などを集めた『古源和尚語録』のごときものが編集されていた可能性が高い。少なくともその一部は江戸初期の時点では閲覽することが可能な状況にあつたことになり、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』の編者である大応派の師蛮は、実際にこれを目の当たりにしているものと見られる。今後、『古源和尚語録』の類が発見されることでもあれば、邵元の禅風はもろろんのこと、その動靜もさらに詳しく辿ることが可能とならう。

現存する墨蹟

邵元に関する文物としては、中国の嵩山少林寺や泰山靈巖寺に石碑が残され、また福岡市今津の勝福寺に夢窓疎石の頂相に付した像贊が伝えられているわけであるが、そのほかにつぎのごとき墨蹟が現存している。

大阪府泉北郡忠岡町忠岡中に存する正木美術館に邵元が

賛を付した「白衣観音図」一軸が所蔵されている。絹本墨画淡彩で、縦六一・三センチ、横二九・六センチとなっており、邵元の賛は、

現三十二心、施三十四無畏、

雖隨_レ類化_レ衆、不離_三摩地_一。

邵元拝賛。「方印」

という五言四句の偈頌であり、邵元の直筆になるものとしては先の夢窓疎石の頂相賛とともに貴重な仏祖賛といつてよい。便宜上、さらにこれを書き下して示してみるならば、およそ以下のごとくにならう。

三十二心を現じ、十四無畏を施す。

類に隨いて衆を化すと雖も、三摩地を離れず。

邵元 拜して賛す。

この「白衣観音図」は一説に「伝可翁宗然筆」ともされており、南北朝の水墨画の巨匠として名高い可翁の作とも伝えられている。ただし、観音図の右下に「枯山」の朱文鼎印が押され、朱文二重郭方印が押されているが、可翁とは判読しがたい。可翁については大応派の可翁宗然（普濟大聖禪師、？一三四五）と同一人物であるか否かはいまだ決着を見ていない。仮に可翁宗然であるとすれば、宗然が生前に画いた「白衣観音図」に対して、元から帰国した邵元が後に絵画を目の当たりに拝して賛を付していること

にならう。

同じく正木美術館には邵元が揮毫した「正法眼蔵涅槃妙心」の墨蹟一軸が所蔵されている。この墨蹟は紙本墨書で、縦一一〇・三センチ、横五五・八センチとなっており、署名などは存しないが、左下部に「古源」の朱文方印が押されている。

ところで、かつて東福寺山内に存した邵元の塔頭である南泉庵には、当然のことながら邵元の墓塔が立石されたはずである。南泉庵は双峰宗源の塔頭である桂昌庵に付属する子院であり、塔頭には祖師の墓塔のみでなく、往時のすがたを刻んだ木造坐像や画像頂相をまつるのが通例であるから、もともと南泉庵には邵元生前のすがたを髣髴する開山像やゆかりの品々が存したことであろう。しかしながら、南泉庵はすでに廃絶して久しく、多くの活躍をなした邵元のすがたは残念ながら現今に伝えられていない。一方、邵元を開山に仰いでいる伊予の臨江寺においても位牌のみが残されているにすぎず、邵元にまつわる文物はまったく伝えられていない。

おわりに

邵元は唐代の南泉普願（王老師）の物外の宗風を慕い、また単に臨濟宗旨のみでなく、曹洞宗旨にも通じている点

で特徴的である。しかも能筆にして詩文の才にも恵まれて、偈頌や文章をよくしたことは、その在元中に撰した塔銘や、帰国後に撰した詩文や序跋などによっても十分に窺えるところである。

思うに邵元がその生涯においてもっとも輝いていたのは、おそらく高山の少林寺など華中の禅林にて過ごした在元中の一時期ではなかったか。邵元はまさに人生でもっとも充実していた壮年期を故国を離れて過ごしていたのである。この間、邵元は日本禅林のしがらみからも解放され、誰にも縛られることなく、きわめて自由に生きられたように思われてならない。

その系統もまったく違う北地曹洞の禅者たちとの交流は、邵元にとってよほど得るところが大きかったのであろう。そして、また曹洞禅者たちも好んで邵元と関わりを持つとうとしている。そんな中で邵元は彼らから依頼されて碑文などを撰し、その才腕を遺憾なく發揮できたわけである。

しかるにそんな邵元の足跡は当時の日本禅林において十分に評価されなかったのではなからうか。帰国した邵元に対して真の評価をなし得たのは、あるいは夢窓疎石など限られた禅者のみであったのかも知れない。しかし、その良き理解者でもあった疎石もまたまもなくに示寂しており、

邵元はしだいに聖一派の一員としてしか評価されないようになっていく。

ところで、『扶桑五山記』五などによれば、邵元が示寂して数年を経た貞治六年(一三六七)九月上旬に、邵元と同門に当たる東福寺の第二七世住持の定山祖禪が、『統正法論』一巻を撰述して遥か中国山西の五臺山に贈っている。内容は暗に比叡山の天台宗徒の横暴を諷したものであり、その文辞があまりに激烈であったがために、「応安山徒の嗽訴」を引き起こしたとされ、『神興入洛記』や『読史愚抄』巻二〇などによれば、祖禪はこれがもとで応安元年(一三六八)一月に山徒の強訴によって遠江(静岡県)に配流されている。ともあれ、祖禪が遠く五臺山と関わりを持ち得るのは、明らかに法兄弟の邵元の影響によるものと見られ、邵元が在元中に果たした事跡が決して無駄ではなかったことが改めて髣髴される。

邵元が示寂した後、わずか五年を経過した日本の貞治七年(応安と改元、一三六八)に、それまで中国の大地を支配していた大元帝国が滅亡し、漢民族の王朝である大明帝国が建国され、年号が洪武元年と改まっている。邵元はまさにかつて壮年の時代を自ら東奔西走した元という大國の滅亡を知ることなくこの世を去っているわけである。そして、明代になると、日本からの入明僧もかつてのとき自由な

遊方が許されなくなっている。邵元らの生きた元朝治下こそ、日本をはじめとする諸外国の訪中僧が国家や民族間の違いなどを越えて、もっとも華々しく活躍することが許され、また正当な評価を受け得た時代であったのかも知れない。

註

(1) 夢窓派の春屋妙葩(智覚普明国師、一三二一—一三三八)の『智覚普明国師語録』巻六「偶頌」には、

次下韻淳古年篤孝夢亡母一紀之加以哭也師 物外者南泉老人軒扁。

抑非刻木最伝名、也勝空桑亦寄生、自泣沾衣愁未解、但陪随坐語猶明、影留物外泉終夜、夢覚海東龍接城、一箇男児云決志、世間何異幻皆成。

という偶頌が伝えられている。物外とは南泉老人の軒扁なりとあるが、ここにいる物外とは物外軒、南泉老人とは邵元のことを指している。古年、淳という禅者が如何なる系統の禅者なのかは定かでないが、その篤孝にして亡母を夢見たさまを、物外軒の南泉老人すなわち邵元の帰国に際しての故事に準えているわけである。邵元が在元中に母のことを夢に見た事跡が広く当時の京都禅林に知られていた証しといえよう。

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

(2) 邵元が帰国した貞和三年(南朝の正平二年)と同じ年に帰国した禅者は知られていないが、『東福友山和尚行状』によれば、友山土俵や此山妙在らが康永四年(貞和元年と改元一三四五)に帰国している。また『圓太曆』によれば、観応元年(一三五〇)には龍山徳見・特峰妙奇・無夢一清らが帰国し、『無文還禅師行実』、『無文禅師行状』によれば、同じくこの年に無文元還・義南・碧巖燦らが帰国している。一方、『輿東陵日本録』によれば、観応二年(一三五二)に曹洞宗宏智派の東陵永興が来日を果たして天龍寺の夢窓疎石に迎えられている。当時、かなり多くの入元僧が頻繁に往来していたことが知られる。

(3) 夢窓疎石については、玉村竹二『夢窓国師 中世禅林主流の系譜』(サーラ叢書一〇)を参照。疎石は貞和二年三月に天龍寺住職を退いて雲居庵に退閑しており、同じ年に法嗣の無極志玄(仏慧禅師、一二八一—一三五九)が天龍寺第二世に陞住している。その後、疎石は観応二年四月に僧堂立柱とともに天龍寺に再住しているが、同じ年の八月には来日した曹洞宗宏智派の東陵永興を第三世に拝請し、九月三〇日に三会院南詢軒において示寂している。

(4) 靈龜山天龍資聖禅寺(はじめ厩寺)は山城(京都府)葛野郡嵯峨(いま京都市右京区)に存し、古くは嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が承和年間(八三四—八四八)に唐僧義空のために営んだ檀林寺の跡地とされ、また離宮龜山殿が所在

したところである。足利尊氏・直義が夢窓疎石の提言を受け、後醍醐天皇の冥福を祈るために暦応二年(一二三九)に創建がなされている。暦応四年(一二四一)に五山第二位となり、康永二年(一二三三)に仏殿・山門・法堂などが完成している。至徳三年(一二八六)に五山第一位に列せられている。大本山天龍寺編『天龍寺』(東洋文化社)が存する。

(5) 夢窓疎石が慕った唐代の石頭希遷(無際大師、七〇〇-七九〇)は「参同契」の冒頭で「竺土大仙心、東西密相付、人根有利鈍、道無南北祖」と記している。

(6) 『夢窓国師語録』巻上「再住山城州瑞龍山太平興国南禅寺語録」に「南山和尚遺書至上堂」「東福双峯禅師遺書至上堂」が収められ、巻下「小仏事」に「南禅為双峯禅師」入祖堂」が収められている。また巻下「夢窓国師語録拾遺」の「祭文」にも「祭双峯禅師文」が収められているから、疎石がかなり深く南山土雲・双峰宗源と関わっていたことが知られる。

(7) 東京大学史料編纂所所蔵『夢窓国師会下乗弘法語』は建仁寺両足院所蔵本を大正六年(一九一七)七月に書写したものである。内題を『靈龜山天竜寶聖寺乘弘』といい、冒頭に「貞和乙酉初開法堂、中本編」とあるから、貞和元年(一二四五)に疎石が天龍寺に開堂して後の夏冬の結制の記録であり、編者は夢窓下の中岩中本であることが知られる。

また後半に「提綱、見性海」「円覚後堂寮冬至乘弘、旨別源」「鳳臺主寮結夏乘弘、旨別源」「大聖禅師作乘弘法式并小仏事」を収めている。末尾に「永享四載二月廿日、書於寿福丈室西窓下」とあるから、永享四年(一四三三)二月一日に鎌倉寿福寺の丈室において筆写されたものであることが知られる。

(8) 『夢窓国師会下乗弘法語』によれば、貞和乙酉すなわち貞和元年(一二四五)の結夏は首座鑑翁士昭・後堂無際士永(青山慈永)・書記中岩中本・蔵主損庵良為であり、冬至は首座柳深契愚・後堂方外宏遠・蔵主無際弥浩である。丙戌すなわち貞和二年(一二三六)の結夏は首座南峰妙讓・後堂晦谷祖曇・書記絶照智光(先)・蔵主古天周誓であり、冬至は首座枯木紹宋・後堂清深通徹・書記壁山法球・蔵主虎深靈光(文)である。丁亥すなわち貞和三年(一二三七)は結夏が首座鏡舟徳濟・後堂黙翁妙誠・書記適庵法順・蔵主曇芳契鐘(周応)であり、冬至は首座鏡舟徳濟・後堂春屋妙葩・書記不遷法序・蔵主黙庵周論である。戊子すなわち貞和四年(一二三八)の結夏は首座閑叟守閑・後堂中岩中本・書記奇峰志雄・蔵主勝庵伯奇であり、冬至は首座古源契源・後堂平山善均・書記無際弥浩・蔵主鑑深周察である。己丑すなわち貞和五年(一二三九)の結夏は首座端照・後堂絶照智光・書記無涯普廣・蔵主省哲であり、冬至は首座菊趣恵圓・後堂適庵法順・書記損庵良為・蔵主妙珠

である。つぎの観応元年（一一三〇）の結夏は首座悦岩智間・後堂滅翁妙勲・書記徹叟叔晃・蔵主先覚周恬であり、冬至は首座平山善均・後堂心初祖肇・書記春岩祖令・蔵主東山妙演である。最後の観応二年（一一三一）結夏は首座無際士永・後堂奇峰志雄・書記虎溪靈文・蔵主正庵周雅であり、この年の九月三〇日に疎石が七七歳で示寂している。この中で夢窓派以外の他派の禪者で首座に就任しているのは鑑翁土昭・南峰妙讓・古源契源の三人であり、また首座を勤めた禪者の中で鑑翁土昭・枯木紹栄・鉄舟徳濟・古源契源の四人が入元帰国を果たしている。

(9) 『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』の「貞和四年戊子」の項には、

冬十月二十日、仏国禪師三十三年遠忌之日、預先鼎建転法輪蔵、請大小禅律寺院八十余所僧尼、普同供養、四衆兩廊雁立。自雲居庵至蔵殿、転送経函、奉安置之。至日、伶人奏楽、有紫雲作蓋、瑞彩溢目。

と記されている。貞和四年一〇月二〇日に疎石は先師の高峰顕日に対する三十三回忌を厳修しているから、邵元もこの法要に首座として随喜していることになる。

(10) 『冬安居については明庵宋西（千光法師、一一四一—一一五一）の『興禅護国論』巻下に「夏冬安居、謂四月十五日結夏、七月十五日解夏。又十月十五日受蔵、正月十五日解蔵。此二時安居並是聖制也、不可不信行。我国此儀絶久矣、

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

大宋国比丘者、二時安居無闕念」とあり、江戸期の無著道忠（一六五三—一七四四）の『禅林象器箋』巻四「節時門」に「和漢禅林、夏安居之外、坐冬安居。即以十月十六日結、到明年正月十五日。以謂其便于禅坐、勝夏安居」とある。

(11) 無際弥浩については『延宝伝燈録』巻三五「京兆真如無際弥浩禅師」の章に簡略な記述が存しており、疎石の法嗣で京都の万年山真如寺に住持したことが知られる。平山善均については同じく巻二四「京兆臨川平山善均禅師」の章に簡略な記述が存し、疎石の法嗣で京都の靈龜山臨川寺に住持したことが知られる。また鑑溪周察についても、同じく巻二五「鑑溪周察蔵主」の章が存しており、疎石の法を嗣いでいるが、諸寺には出世開堂しなかつたものらしい。

(12) 「仰山又手進前」の古則公案については、『五燈会元』巻九「潭州瀉山靈祐禅師」の章に、

上堂、仲冬嚴寒年年事、暑運推移事若何。仰山進前、又手而立。師曰、我情知、汝答這話不得。香嚴曰、某甲偏答得這話。師驪前問。嚴亦進前、又手而立。師曰、類遇寂子不_レ會。

という問答を伝えている。邵元の兼弘法語は唐末に瀉仰宗の瀉山靈祐（大円禅師、七七—八五三）が門下の仰山慧寂（小釈迦・澄虚大師・智通大師、八〇三—八八七）と香嚴智閑（饗燈禅師、？—八九八）の二高弟と交わした問答

を受けるものである。

(13) 『夢窓国師会下乗弘法語』によれば、「このときの」拈提「はつぎのようである。

僧問「黄竜、如何是衲僧分上事。竜云、滴水滴凍。天龍即不然、有問如何是衲僧分上事、即向他道、一九二九、相逢不出手。上方与麼揭示、可謂九重紫測不可測。乘非上座 漫呈浅伎、欲窺涯淡。此僧問頭、无党无偏、黄竜答处、尽善尽美。試老師如道一九二九相逢不出手、又作生剖破去。良久云、不因一番寒徹骨、争得梅花撲鼻香。

前半は夢窓疎石が黄龍慧南(普覺禪師、一〇〇二—一〇六九)の古則を取り上げたものであり、『宗門聯燈会要』巻一三「洪州黄龍慧南禪師」の章に「示衆云、江南之地、春寒秋熱、近日已来、適水滴凍。僧問、適水滴凍時如何。師云、未是衲僧分上事。云、如何是衲僧分上事。師云、適水滴凍」とあるのを受けている。「乘非上座」より以下は首座の邵元が乗払して疎石の語句を拈提したものである。

(14) 中巖円月の転派事件に関しては、玉村竹二『五山禪僧伝記集成』の「中巖円月」の項や、薩木英雄「中世禪者の軌跡 中巖円月」(法蔵選書四二)などを参照。

(15) 『和漢禪刹次第』「日本諸国諸山之禪院」の「五畿内 山城州」には、

大聖寺 正法山、開山双峰国師。

と記されており、また『双峰国師語録』の「双峰国師年譜」の後にも、

正法山大聖寺 在洛東九条 万松路山安国崇聖寺 在加州、右二刹、師之開基、陞為諸山。

と伝えられている。加賀(石川県)の万松路山安国崇聖寺とともに双峰宗源が開創した禪寺であって、山城(京都府)の諸山に列せられていたことが知られる。

(16) 正法山大聖寺はもと京都東九条に存していたが、すでに廃寺となつている。今枝愛眞「中世禅宗史の研究」第二章、中世禅林機構の成立と展開」の「中世禅林の官寺機構」によれば、

大聖寺は、もと京都東九条にあつたが、いまは廃寺である。山号を正法山という。常盤井宮恒明親王はふかく禪に帰依して、東山にあつた妃の故宮を禪院に改めて大聖寺とし、聖一国師円爾の法嗣双峰宗源をその開山とした。とまとめられている。大聖寺は大覚寺統の恒明親王(常盤井宮・入道一品式部卿、一三〇三—一三五一)を開基としており、宗源や邵元のほかに、『乾峯和尚語録』巻二「序跋記銘疏」に「定山首坐住正法名山大聖禪寺山門疏」が存しているから、邵元と同門に当たる定山祖禪も首座位として入寺していることが知られ、当時すでに諸山に列しているものと見られる。

(17) 『広智国師語録』巻五「附録」の「乾峯和尚行状」によれば、

貞和戊子、年六十四住南禅。十月廿日、天龍開山夢窓國師、為「仏国禅師三十三回忌、請師陞座」(中略)十二月、南禅閣上画「五百羅漢、左武衛將軍、入山聽説法。文和三年、夢窓國師大祥忌陞座。

と記されていることから、乾峰土曇は貞和四年に南禅寺の第二〇世に就任していることが知られ、まさに邵元が大聖寺に住持していた時期に相当している。

(18) 『双峰国師語録』「真讚」によれば、月江正印がなした真贊とは、

聖一國師師之師、円照老人師之祖。大開鋪席一向扶桑、慣用徑山文武火。直下児孫、如彪如虎。我見燈明仏、本光瑞如此。

至正甲申、前住「阿育王山」仏心禅師月江正印、為「雪竇光蔵主」書。

というものであるが、これは『月江和尚語録』巻下、「仏祖讚」には収められていない。また大道一以の真贊とは、

真贊。大道以和尚。
雅号名「双峰」、所「以兼」両寺権柄、靈塔扁「金充」、所「以」為「万乘国師」。列祖命脉、諸仏威儀。弘子頭上、日月臨照。拄杖頭辺、天地寛廓。贊不「及」処若「之」何。大休大歇。大安樂。

というものであり、これは『大道和尚語録』坤「真贊」に「双峯国師 桂昌祖」として載るものと同内容であり、一

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

以も法姪として宗源の頂相に真贊を付しているわけである。(19) 等持寺と古先印元・夢窓疎石の関わりについては、今枝愛眞『中世禅宗史の研究』「第三章、中世禅林と武家社会」に所収される「足利直義の等持院創設」に詳しい。

(20) 「古先和尚行状」によれば、

延元四年、師四十三歳、天龍夢窓国師請住「甲州惠林」、師已赴命、拈香嗣「天目中峯大和尚」。明年住「京師等持」。貞和三年、師五十三歳、遷「京師真如」。未幾、再董「等持」。源相公偶以「建長虚席」敦請、固辞讓以「無隠時和尚」。師五十六歳、住「京師万寿」、又遷「相州浄智」。

とあるから、古先印元は南朝の延元四年(北朝の暦応二年、一三三九)に甲斐(山梨県)の乾徳山惠林寺に開堂して元国の中峰明本(幻住老人・智覚禅師・普応国師、一二六三—一三三三)に嗣承香を焼き、翌年に等持寺に住持し、北朝の貞和三年(一三四七)には京都の万年山真如寺に遷住していることが知られる。

(21) 邵元と前後して等持寺には夢窓派の禅者が相次いで住持しており、等持寺はあたかも夢窓派の徒弟院のごとき様相を呈している。すなわち、「圓太曆」「観応二年正月二十三日」の条によれば、観応二年(一三五二)正月に疎石の法嗣である晦谷祖曇(一三五八)が等持寺に入寺している。また南山土曇に剃度を受けて初の無際土永と称し、後に疎石の法を嗣いだ青山慈永(仏観禅師、一三〇二—一三六九)

も「仏観禪師行状」によれば、

師主多宝院、次領瑞光寺住持。未幾、遷居洛等持寺。此寺者、是征夷大将軍源公爲扶持王道、帰依仏乘所開建之精藍也。

とあって、播磨の瑞光寺から等持寺に遷住しており、延文二年(一一三五七)八月に鎌倉の浄智寺に陞住するまで住持を勤めている。しかし、残念ながら『仏観禪師語録』には等持寺の上堂語録などは収められていない。さらに同じ夢窓派の春屋妙葩も「宝幢開山智覚普明国師行状実録」によれば、

延文二年丁酉九月、值先国師七年忌、法儀尽善、觀者倍信。是歲、大将軍源公、延師住京師等持寺。

とあり、延文二年に足利尊氏の招請で等持寺に住持している。おそらく状況からして邵元は祖曇と慈永の中間に等持寺に住持しているものと見られる。

(22) 竹内尚次編『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録の研究』(国書刊行会刊)の九四九頁より九五〇頁を参照。

(23) 福岡市西区今津の龍起山勝福寺は、現在、臨濟宗大徳寺派に属しているが、寺伝によると、建長元年(一一四九)に松源派(大覚派祖)の蘭溪道隆(大覚禪師、一一二三—一二七八)によって開創されたと伝えられる。すなわち、寛元四年(一一四六)に来日した道隆がしばらく博多の瑞光山円覚寺に逗留寓居し、その間に福勝寺をも開いたという

のである。その後、夢窓疎石の法嗣である方外宏遠(?

一三六三)が中興し、延文五年(一一三六〇)には勅願所となつている。中世には七堂伽藍の完備した大禅刹であつて、末寺・子院およそ三〇余寺を有していたとされ、足利尊氏をはじめ領主・地頭の安堵状など中世文書二一点を現存している。また国の重要文化財として絹本着色の「大覚禪師画像」や「夢窓国師画像」などが伝えられている。圭室文雄編『日本名刹大事典』(雄山閣刊)などを参照。なお、『勝福寺文書』によれば、初期における勝福寺の住持者としては、

開山大覚禪師蘭溪道隆・前建長当山第一世蘆航道然・前建長当山第二世宏辯若訥・前円覚当山三世雲山智越・当山第四世隆舜侍者・当山第五世進瓊侍者・第六世当山中興夢窓疎石・前浄妙当山第七世方外宏遠・前南禅当山第八世仏智宏照。

となつており、道隆が開山となつて以来、初めは大覚派の禪者らが住持しており、その後疎石が第六世として中興開山となつていことが知られる。

(24) 重要文化財の「夢窓国師頂相」の賛については、渡辺雄二「福岡・福勝寺蔵大覚禪師像」、『仏教芸術』第一六六号「特集・九州の禅宗美術」に所収)に蘭溪道隆の画像に付随して簡略な考証がなされている。画像は絹本着色で掛幅装、縦は九四・〇センチ、横は四六・八センチとなつている。

(25) 『夢窓国師語録』卷下「夢窓国師語録拾遺」の「七朝国師徽号」や『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』の「観応二年辛卯」の箇所によれば、疎石に対して心宗国師の加号がなされたのは観応二年（一三五一）八月一日のことであり、光厳上皇より特賜されている。疎石が示寂したのはその年の九月三〇日のことであるから、それ以降に邵元は贊を付していることになろう。後光厳天皇が普濟国師の号を追諡したのが北朝の延文三年（一三五八）九月六日であるから、この画像贊が邵元によって記されたのは疎石の最晩年か示寂してまもない頃から延文三年までの間に限られることになろう。

(26) 「勝福寺の「夢窓国師頂相」には画面の下部に墨書きで、右下に「周音蔵主捨入」とあり、左下に「充勝福寺供養」と記されている。この書体も上部の邵元の贊と同筆と見られ、邵元によって記されたものであろう。とすれば、この「夢窓国師頂相」は勝福寺で疎石の供養のために蔵主の周音が喜捨したものとということになる。

(27) 「規範八箇条」とは、円爾が弘安三年（一一八〇）六月一日に「東福寺条々事」として門下に示した壁書であり、東福寺のほか、承天寺・崇福寺および水上山万寿寺の維持継承に関する掟制が記されている。その中の第四条に「東福寺長老職事、円爾門徒中、計器量人、代々可譲与也」とあり、他派を交えず、門派内で住持を相承すべき旨が定

められている。なお、東福寺に関する前後の記事は『東福寺誌』を参照。

(28) 一条経通の逝去については、『大日本史料』第六編二六「南朝正平二十年・北朝貞治四年」の「三月十日」の項を参照。『友山録』巻上「拈香」に「後芬陀利華院閔白殿下七々日拈香」を収める。

(29) 当時、一条経通は邵元のみでなく、そのほかにも聖一派の禅者と積極的に関わっている。『海蔵和尚紀年録』によれば、一条経通は早く康永元年（一三四二）四月に虎関師練に受衣を乞っている。『大道和尚語録』に付録される「前任南禅大道以禅師伝」によれば、

文和二年六月、一条藤丞相、請住普門。普門時荒廢、因有_レ道漸無力_レ撐_レ門戶、漏屋尋常持_レ傘眠之句_上。十一月、巻_レ衣歸_レ于淡之故居。延文元年正月、重_レ命_二一条藤丞相_一、住_レ東福。先是、貞和三年、師兄固山住山曰、_レ命_二藤丞相_一、一条経通公、命_二慶_レ盧遮那宝殿。然大像未_レ貼_レ金、毫光未_レ安。師乃抽_レ衣資、設_レ玉毫、募_レ衆緣、貼_レ金。於是莊嚴全備焉。

と記されており、大道一以が一条経通の命に応じて文和二年六月に普門寺第一八世に、延文元年一月には東福寺第二八世に住持していることが知られる。この間、一以が文和二年一月に普門寺の蔵書を整理して『普門院経論章疏語録儒書等目錄』（『文和目錄』とも）一巻を撰述したことは

名高い。一方、「広智国師乾峰和尚行状」によれば「文和四年、兼領_二建長・円覚。三月赴洛。四年、藤丞相以_一菩提院為_二寿塔」とあり、乾峰土曇が鎌倉の建長寺・円覚寺の住持を終えて帰洛した際、一条経通が東山に長栄山宝菩提寺(菩提院)を創建し、土曇のための寿塔となしている。

(30)「双峰国師年譜書」には一条内通と双峰宗源との関わりについて、

正和四年之卯 五十三歳 春、受_二惠日之請_一 四月八日入_レ寺。藤丞相、時々入_レ山、諮_二參禅要_一、造詣益深、便_レ拜_二師受_一伽梨鉢多。

とあり、内通がしばしば東福寺に到って参禅して造詣を深め、宗源より袈裟と応量器を授けられている。『双峰国師語録』「祭文」においても、固山一輩が「藤丞鈞旨、力推惠日些、過知_レ命之_三」と述べている。

(31) 聖一派の大陽義冲(黙庵、一一八二—一一五二)の「大陽和尚行実」によれば、

康永元年壬午、住_二城南普門_一。癸未四月、惠奉虚席、大檀越博陸公、降_レ帖起_レ師、盖鈞意之所_一欽嚮、而衆望之所_一歸也。貞和元年之酉、解_二惠日之印_一、再住_二凌雲_一。

とあるから、義冲が康永二年(一一三三)より貞和元年(一一四五)まで東福寺第二〇世を勤めていることになり、住持期間は丸二年間となろう。また、「固山叢和尚行状」によれば、

貞和元年之酉、師六十二歳、四月廿日、東福寺入院。至六十四、七月十九日、退_二東福_一。

とあり、固山一輩は貞和元年より同三年まで二年余り第二二世を勤めている。

(32)「平田和尚伝」によれば、平田慈均は鎌倉の人で、南禅寺の道山玄晟に参じた後、入元して古林清茂や中峰明本らに学んでいる。帰国して後の記事としては、

及_レ還_二本朝_一、出世初住_二豊之崇福・播之円応_一、次住_二普門_一、董_二東福・南禅_一。

と簡略な記述しか載せられていない。しかしながら、『平田均禅師語録』によれば、慈均は前関白の九条道教(円惠・三縁院殿、一一五一—一一四九)の檀那帖を得て貞和六年(観応元年、一一五〇)二月十九日に東福寺第二四世に入院し、一旦、退院して後、延文二年(一一五七)八月四日には南禅寺第二五世に陞住している。

(33) 土庵土顔が東福寺第二六世に住持した年時については、岩崎家本「兼綱公記」の文和元年十一月四日の条に、

十一月四日甲戌、是日、東福寺入院事、東福寺新命、土顔ナルベシ、入院也。白槌南禅寺長老陵山和尚、云々。新命者、南山弟子也。

とあるから、文和元年(一一三五)十一月四日に土顔が新命住持として東福寺に入院していることが知られる。このとき白槌師を勤めたのは南禅寺の陵山和尚とされるが、お

そらく黄龍派の龍山徳見（真源大照禪師、一二八三—一三五八）のことであろう。また『玉英記抄』「官位部」の観応三年（一一三二）九月一〇日の条に、

東福寺長老拈圖、大衆不來。於二阿班前、予自取之、得土願。即成令旨。

ともあるから、これより先、九月一〇日には次期の東福寺住持を土願とすることが一条経通によって定められ、経通から土願に令旨が下されている。おそらくこのときの住持はいまだ邵元が勤めていたのである。

(34) 「智覚庵開山大道和尚行状」によれば、

延文元年正月、応二一条藤公丞相釣命、住東福寺。(中略)翌年正月、肥通淡之小刹。

とあって、大道一以が東福寺に入院したのが延文元年（正式には文和五年）一月であったことが知られ、一年後に退院している。この点は先に示した「大道和尚語録」に所収される「前住南禅大道以禪師伝」も同様である。

(35) 足庵祖麟は陸奥の人で、大覚派の桑田道海に随って出家し、夢窓疎石のもとに投じた後、入元して中峰明本や古林清茂らに参学している。帰国後、鎌倉寿福寺の第二五世となり、嗣承香を道海の高弟である靈岩道昭に授けられている。京都の万寿寺の第一九世、建仁寺の第三四世に陞住し、文和三年一月二十七日に世寿六六歳で示寂している。

(36) 赤松則祐は則村の三男であり、はじめ比叡山の天台座主尊

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

雲（護良親王、一三〇八—一三三五）に近侍し、建武政権の発足に功をなし、後には足利尊氏による幕府の成立に尽力している。父則村や兄範資が死去した後、赤松氏の総領となり、播磨守護に任ぜられている。禅僧との交流が深く、大応派で大徳寺二世の徹翁義亨（大祖正眼禪師、一二九五—一三六九）らに学び、一山派の雪村友梅に帰依して宝林寺を開創している。応安四年（一月二十九日）六一歳で没しており、諡号は宝林殿自天妙善である。また父の赤松則村（円心居士）は初め元弘の乱で功を挙げ、建武政権の樹立に尽力したが、報いられるところが少なかったために足利尊氏に与して足利幕府の成立に大きな働きをなしている。禅僧との関わりも深く、とくに一族出身の宗峰妙超（大燈国師、一二八二—一三三七）の檀那として京都紫野の龍宝山大徳寺の創建に関与し、また播磨の法雲寺を開基して雪村友梅を開山に迎えている。観応元年（一一三〇）一月一日に京都七条邸で没した際には東山建仁寺の大龍庵（友梅の塔頭）に埋葬され、諡号は法雲寺殿月潭円心と称されている。詳しくは高坂好「赤松円心・満祐」（吉川弘文館、一九七〇年）や同氏「中世播磨と赤松氏」（臨川書店、一九九一年）などを参照。

(37) 『勅諭宝覚真空禪師前住大唐京兆翠微寺後住日本京城東山建仁禪寺雪村大和尚行道記』によれば、

丁丑之歳、干戈平定、播州牧源円心、夙願昇建新寺於

赤穂郡苔縄之郷、而欲遷天下有道名宿、為開山住持。上藤範秀以師酬其所問也。乃厚加聘礼迎之。秋七月朔、拜請開山。冬十月望、創建大仏殿、寺名「法雲昌國」、山号「金華」、皆宸染也。

と記されており、建武四年に赤松則村(円心)が伽藍を建立し、七月に友梅を開山に拜請していることが知られる。

- (38) 友梅が在元中に北地の禅林に赴いている消息については、すでに拙稿「入元僧古源邵元の軌跡(中)」 嵩山少林寺首座から京都東福寺住持へ、「駒澤大学仏教学部研究紀要」第六〇号)の註(15)にて触れているので参照されたい。

- (39) 『宝覚真空禅师語録』乾の「播州路金華山法雲昌国禅寺語録」によれば、

曆応二年歲在己卯、冬至日、迎接宸翰寺額綸旨及諸山帖、兼謝通雙首座上堂。

とあり、友梅が法雲寺に入寺開堂したのは曆応二年(一一三三九)の冬至の日であったことが知られる。

- (40) 播磨の法雲寺が諸山・十刹に列せられた経由については、今枝愛眞『中世禅宗史の研究』第二章、中世禅林機構の成立と展開」の「第二節、中世禅林の官寺機構」を参照。

- (41) 兵庫県赤穂郡上郡町苔縄の金華山法雲寺は現在、臨済宗相国寺派に属している。赤松則村が建武三年(一一三三六)またはその翌年に開創し、雪村友梅を開山に迎えて赤松氏の菩提寺としている。ちなみに、『本朝高僧伝』巻二七「播州

円心寺沙門玄素伝」には、

曆応二年、如播州、開円心而居。赤松円心居士、延以「金華之新寺」、素讓於雪村梅公。

という記事が見られる。これによれば、法雲寺はもともと赤松則村(円心)が大覚派の大朴玄素(真覚広懺大師、一一二八八—一三四六)を開山に招請したものでらしい。しかし、この依頼に対して、玄素は自ら開山に就くことはせず、その地位を友梅に譲ったとされる。玄素も友梅と同じように入元しており、元の宣宗より真覚広懺大師の勅号を賜っている。ならば則村ないし赤松氏は意識的に入元帰国した禅僧を播磨の領地内に迎えていることになる。中世播磨の地誌を収める『峯相記』(『続史籍集覧』一)や『大日本仏教全書』「寺誌叢書一」に所収)には曆応年間(一一三三八—一三四一)における法雲寺の賑わいが記されているが、赤松氏が滅亡して以降は寺運が衰微している。圭室文雄編『日本名刹大事典』の「法雲寺」の項などを参照。

- (42) 播磨の宝林寺については、『扶桑五山記』二「日本諸寺位次」の「准十刹」に、

十五、宝林寺 播州、赤松山、開山宝覚禅师。

と記され、同じく『和漢禅刹次第』「十刹位次」にも、

播磨 宝林寺 赤松山、宝林永昌禅寺、開山雪村和上、宝覚禅师。

と載せられている。兵庫県赤穂郡上郡町河野原に存する赤

松山宝林寺は永祿年間（一五五八—一五六九）に尼子氏による兵火に遭つて全山が焼失したとされ、その後、真言宗の僧によつて再建され、現在は東寺真言宗に属して京都智積院末となつてゐる。

(43) 『統芳集』は南北朝期から室町期の五山の禅僧が撰した枯香・疏・陞座・法語・乗炬仏事・拜讚・肖像贊・序などを収録しており、巻中のみが東京大学史料編纂所に所蔵されている。本書の編集者や伝来過程などは定かでないが、末尾に「右統芳集、京都市下京区今熊野町上村觀光氏所蔵、大正四年十月写了」とあるから、上村觀光氏の所蔵本を大正四年（一九一五）一〇月に書写したものであることが知られる。ちなみに『統芳集』に作が収められてゐる禅者（俗人を含む）の名を挙げて見るならば、太清宗清・得岩惟肖・大愚性智・月翁周鏡・魯菴集璉（連）・横川景三・天隠龍澤・東漸健易・以遠漱（澄）期・古源邵元・翔之惠鳳・一条兼良・夢窓疎石・存耕祖黙・景南英文・雲章一慶・仲芳円伊・竹菴大縁・敵中周噩・江西龍派・心田清播・惟南正派・信仲以篤・春浦宗照・大岳周崇（惠林和尚）といふことになる。

(44) 『雪村大和尚行道記』によれば、
己巳夏、勝幢趁_レ舶、泛_二大洋東隅。即本朝元徳改元、師時四十歳矣。仙竺仙泊_二閩江_一、寄雪村西堂、偈云、掛_レ席同為海国遊、寸心如_レ水正悠々。又与_二月山書記云_一、天

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

曆二年五月吉、天風飄々海波立。

見_二竺仙東度集_一、今年己巳、明極・竺仙同_レ舟、道出_二福州_一、着_二日本博多岸_一。庚午入_レ朝。月山友桂見_二一山_一、主_二相州東光寺_一。入_二元土_一、為_二印月江書記_一、延祐六年臘八、為_二国師_一入_二牌於育王禪極雲西塔院_一。育王住持東生徳明仏事、見_レ録。

と記されており、友梅は天曆二年（一三一九）五月以降に福州（福建省）の閩江より日本へと向かつてゐることが知られる。このとき友梅は竺仙梵傳とともに帰国しているものらしく、同じ船で松源派（焰慧派祖）の明極楚俊（仏日焰慧禅師、一一六二—一三三六）も来日し、友梅と同門の月山友桂も同行して帰国しているらしい。

(45) 定山祖禅は出雲（島根県）または相模の出身とされ、邵元と同じく宗源の法を嗣いでゐる。山城の大聖寺に出世し、筑前の承天寺第一七世を経て、東福寺第二七世に就任しており、さらに南禅寺第三三世に陞住している。一条経嗣の帰依で東福寺山内に芬陀利華院を開創している。応安七年（一二七四）一一月二六日に世寿七七歳で示寂しており、その勅諡号は普応円融禅師である。『延宝伝燈録』巻二一、「本朝高僧伝」巻三、「統扶桑禅林僧宝伝」巻一などに伝が存する。

(46) 「智覚庵開山大道和尚行状」や「大道和尚語録」附録の「前任南禅大道以禅師伝」によれば、

延文元年正月、重応^二一条藤丞相鈞命、住^一東福。とあり、大道一^一以が延文元年一月に東福寺第二八世に住していることが知られ、『大道和尚語録』巻上に「住慧日名山東福禪寺語録」を収めている。

(47) 無夢一清は山城の普門寺第一九世より延文四年(一一五九)四月五日に東福寺第三〇世として陞住入院しているが、まもなく退院して備中(岡山県)の井山宝福寺に再住している。その後、応安元年(一一六八)に東福寺山内に天得庵を創建し、五月二四日に世寿七五歳で同庵に示寂している。五村竹二『五山禅僧伝記集成』の「無夢一清」の項を参照。

(48) 固山一輩は東福寺第二二世や天龍寺第四世となっているが、文和三年(一一三四)より東福寺山内の寿塔正光庵に退閑していたわけであり、『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禪寺」の「塔頭」にも「正光菴 固山和尚、嗣^一蔵山、肥前人」と記されている。また「双峰国師語録」巻末「祭文」にも「固山輩和尚」として一輩が宗源のためになした祭文を収めている。ちなみに一輩に対しては、大道一^一以の「祭固山和尚」や無夢一清の「祭固山和尚文」などの祭文が伝えられている。

(49) 『碧山日録』とその編者太極については、五村竹二『碧山日録』記主考(『日本禅宗史論集』下二に所収)の考察が存する。

(50) 「乾峯和尚行状」によれば、

文和四年、兼領^一建長・円覚、三月趣^一洛。四年、藤丞相以^一菩提院^一為^一寿塔。康安元年辛丑十二月十一日、書^一偈曰(下略)。

と記されていることから、一輩が示寂した当時、乾峯土曇は京都東山の長楽山宝菩提院(後に東福寺山内に移る)の寿塔に在って養生していた時期に相当している。

(51) 『關東諸老遺藁』は「五山文学新集」別巻二に収録されており、五村竹二『關東諸老遺藁』考(『日本禅宗史論集』下二に所収)の考察が存する。

(52) 邵元の「頌軸序」と同じく載せられている東陵永興の「同跋」は、

相模万寿無惑西堂和尚、延文丁酉春、分^一福山之座、以^一予為^一乃師一山国師之郷人、故、特為^一作成。延文己亥冬、来^一洛之大雲塔院、又得^一聚首。時有^一繁峯首座、説^一偈以^一喜其来、故賀^一之。江湖上流、宿師碩德、咸^一廣載^一之、遂成^一巨軸、命^一予題^一其後。予不^一辭、但云、珠玉在^一側、覺^一我形穢^一耳。

延文五禩中和節、前住^一建長 四明七十六叟東陵永興、拜^一書于尾^一云。

というものであり、延文五年の中和節に建長寺前住の肩書まで撰せられている。当時、永興は南禅寺の住持を退いて鎌倉に下向しており、文和四年(一一三五)に建長寺第三一世に住持し、さらに延文二年(一一三七)には円覚寺第

二六世に就任していることから、この記事は鎌倉での作と見られる。

- (53) 無惑良欽は一山一寧の法嗣であり、一寧が示寂した後、鎌倉の建長寺や円覚寺で参学に努めていることから、この間に邵元とも道交を結んでいたものらしい。信濃(長野県)の慈雲寺や鎌倉の乾明山万寿寺に住持し、延文四年(一二三九)に上洛して南禅寺に到って一寧の塔頭である大雲庵の塔主を司っているが、このとき三〇余年ぶりに邵元と再会したわけである。その後、良欽は鎌倉の寿福寺第三六世となり、さらに南禅寺第三四世となっている。『延宝伝燈録』巻二二「京兆南禅無惑良欽禅师」の章が存する。

- (54) 相山良永(初号は大山)は京都の藤原氏の出身で、一山派の無著良縁の法を嗣いでおり、書記の職に在った頃、一山一寧の塔頭である南禅寺の大雲庵の塔主を勤めている。その後、山城(京都府)の西禅寺、摂津(兵庫県)の医王山広厳寺(楠寺)から、山城の景德山安国寺など諸山・十刹を経て、京都万寿寺の第四六世となり、さらに建仁寺の第五九世となっている。『延宝伝燈録』巻二二「京兆建仁相山良永禅师」の章によれば、至徳三年(一一三八)―二月二日に世寿五七歳で示寂したと記されているが、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』の「相山良永」の項によれば、至徳三年八月五日に世寿六八歳で示寂したと改められている。

- (55) 南禅寺の変遷については桜井景雄『南禅寺史』、『続南禅寺入元僧古源邵元の軌跡(下)』(佐藤)

史』および桜井景雄・藤井学共編『南禅寺文書』三巻などを参照。

- (56) 雪舟嘉猷は円爾 白雲慧暎 枯山慧海 嘉猷と次第する聖一派の禅者であり、鎌倉浄智寺にて竺仙梵僊にも参学している。安芸(広島県)の定慧寺開山となり、さらに東福寺第三二世に陞住しているが、その年時については定かでない。一にかつて入元して大慧派の楚石梵琦(西齋老人・仏日普照慧辯禅师、一三九六―一三七〇)より、雪舟の道号頌を受けたとされる。

- (57) 『友山録』巻上の巻首に載る「東福友山和尚行状」(『続群書類従』第九輯下では「友山和尚伝」)によれば、

康安元年辛丑、帖命荐至、臨衆慧日。指三山門云、十方有路、四面有門、這裡入得、天下橫行。

とあり、同じく『友山録』巻上「友山和尚住京城慧日山東福禅寺語録」にも、

師於康安元年八月十日入院。指三山門云、十方有路、四面有門、這裏入得、天下橫行。

と記されているから、友山土俵が東福寺に入院したのは康安元年(一一六一)八月一〇日であったことが知られる。

- (58) 洞天源深の示寂年時については、『本朝僧宝伝』巻上「桂昌派」の箇所に「洞天、諱源深、嗣法双峰。住東福、為三十三世。塔号正宗。筑前人。四月二十六日、考貞治二年、化」とあるが、ここでは『東福寺誌』の「正平十九

年・貞治三年」の四月二十六日の箇所に従う。

(59)『五山歴代』「東福禅寺歴代住持位次」には、

二十五、古源邵元 嗣『双峯源』。貞治三年甲辰十一月十一日寂。塔『南泉院』。

と記されており、南泉庵ではなく南泉院となっている。また駒澤大学図書館所蔵『慧日山東福禅寺宗派』の「靈芝山万年桂昌菴」の「東福 廿五世 古源邵元」の項には、

頌曰、末後一句、始到『牢関』、擊『神鉄壁』、蹈『倒銀山』。塔曰『南泉』、有『物外洗塵軒』。

という注記が存しており、ここでは塔を南泉といい、物外洗塵軒が存したとされる。

(60) 五山版『諸偈類要』は七巻七冊より成り、完本は建仁寺の両足院と大中院に所蔵されている。宮内庁書陵部と両足院のものは七巻、大中院は四冊、天理図書館は二巻一冊となっている。巻首に明国より使僧として来朝した天台宗の無逸克勤が撰した序と、いまの邵元の序を載せており、巻末にやはり明国より来朝した臨濟禅僧の仲猷祖闡(桴庵、? 一三八七)の跋を載せている。また希果は別に『諸偈類要』一卷を編纂したともされる。なお『諸偈類要』については、玉村竹二『諸偈類要』をめぐる諸問題』、『日本禅宗史論集』下之一に所収)を参照。

(61) 東岡希果(東岡とも)は上野(群馬県)大福寺の雪嶺希存の法嗣で大覚派に属する禅者と見られている。入元して松

源派金剛幢下の了庵清欲(南堂・慈雲普濟禅師、一二八八

一三六三)らに参じ、帰国した後も同じく竺仙梵僊に学んでいるらしい。鎌倉の建長寺回春庵で『地藏本願経』を刊行したことが縁で、京都の臨川寺に招かれ、貞治年間

(一三六一—一三六七)から応安年間(一三六八—一三七四)に掛けて五山版の出版に尽力しており、とくに『諸偈類要』のほか、『禅林類聚』一五巻を開版したことは名高い。川瀬一馬『五山版の研究』を参照。

(62) 『馬祖翫月』の古則については『景德伝燈録』巻六「洪州百丈山懷海禅師」の章に、

属『大寂闡』化南康、乃傾心依附、与『西堂智蔵』・南泉普願『同号』入室、時三大士為『角立』焉。一夕、三士随侍馬祖、翫月次、祖曰、正恁麼時如何。西堂云、正好供養。師云、正好修行。南泉弘袖便去。祖云、經入蔵、禅帰海、唯有『普願』、独超『物外』。

とあり、また『宗門聯燈会要』巻四「江西馬祖道一禅師」の章などにも載せられている。この馬祖道一の評価が普願の物外の宗風の遠源といえよう。また友山土愚は『友山録』巻上「友山和尚住京城慧日山東福禅寺」において、

中秋謝『首座』上堂。馬祖曾翫月、三人侍『座隅』、弘袖超『物外』、猶是在『半途』。黄檗棒『鉢孟』、匡他王老師、行『道威音前』、早是墮『今屹』。東福別有『尖新句』、拳『示大衆』。以『私子』打『円相』云、今夜一輪滿、清光何処無。

という中秋に首座を謝した上堂を残しているが、これもあるいは南泉庵に退隠していた邵元を意識に入れた表現であるうか。

(63) 玉村竹「五山禅僧伝記集成」の「友山士偈」の項によれば、この潜溪処謙の三十三回忌における土俵の陸座説法について、

潜溪示寂は元徳二年 一三三〇 であるから、その三十二年忌正当は貞治元年 一三六二 であるが、何等かの事情で延在し、貞治三年、友山の臨川入院以後に行なわれたのであろう。

と推測している。「東福友山和尚行状」には東福寺住持中の記事として、

西山臨川、乃門庭甲之、特請師補其席。貞治癸卯、關山正覚国師掩光之十三白也、師為陸座普説。潜溪普円国師法門之叔父也、亦為其徒請臨忌普説。

とこの間の事情を伝えている。この説に従えば、この年回忌が行なわれたのは、邵元の最晩年すなわち示寂の年であったこととなるう。

(64) 内閣文庫所蔵『平田和尚語録』(『平田和尚語録』とも)の「平田和尚住瑞龍山南禅寺語録」に、「延文二年七月廿九日、於雲興庵接黃勅、八月初四日入寺」とあるが、退院の年時は示されていない。また「平田和尚伝」には帰国した後の慈均の状況について、

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

及遺本朝、出世初住豊之崇福・播之円応。次住普門、董東福・南禅。貞和三年九月十六日入滅。有偈云、生死去来、无此无彼、明月行空、清風匝地。投筆逝矣。南禅塔曰雲興庵。開長州下関回日山永福寺。下関則赤間関也、古人或以赤壁呼之。と簡略に伝えるにすぎず、住山期の年時などが示されていない。

(65) 『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禅寺」の「諸塔」に、少林菴 与可和尚、名心交、嗣定山。

とあり、桂昌庵の子院である少林庵を定山祖禅の塔頭ではなく、祖禅の法嗣で東福寺第一二世となった与可心交(如水道人? 一四三七)の塔頭として扱っている。しかし、祖禅はその生前より「少林和尚」と称せられていたことから、少林庵は芬陀利華院とともに祖禅の祖院であったものと見てよく、これをそのまま心交が相続継承したのであるう。

(66) 土俵が潜溪処謙に参学した消息を「東福友山和尚行状」は關提董豊之蒋山、師相入関西、提命俾侍香、左右服勤涉四寒暑。関潜溪和尚領南禅席、振策東土、插单其間。是时会中成龍象之選也。溪擢師掌藏教、亡何而辞去。

と伝えている。南山土雲に円覚寺で学んで後、豊後(大分県)の蒋山万寿寺に赴いて關提正具に参じて侍香を勤め、

南禅寺の潛溪処謙の席下に連なつて蔵主の職に就いている。嘉暦三年(一三三八)に同門の正堂土頭とともに入元しているが、この間、邵元とも道交を結んでいたものらしい。

(67) 『明徳頌軸』は東福寺永明院の所蔵で大道一以にまつわるものであり、現今は東福寺光明院に保管されており、一般には、『五山文学新集』別巻一「詩軸集成」に所収されて知られる。跋文は邵元の自筆であり、邵元の現存する筆跡としても貴重である。これには一以や邵元のほかに、東福寺の定山祖禪や伊予(愛媛県)の好成山善応寺開山である正堂土頭ら三八人の禪者が偈頌を寄せている。

(68) 『景德伝燈録』巻一一「洪州武寧縣新興嚴陽尊者」の章には「師常有二蛇一虎、随_レ從左右、手中与_レ食」とあり、南泉下の趙州從諗(實際大師、七七八—八九七)の高弟に当たる嚴陽善信が常に一匹の大蛇と二頭の虎を飼ひ慣らし、手ずから食を与えていた故事を伝えている。一方、『感山雲臥紀談』巻上「嚴陽尊者」の項では、嚴陽山の善信が二虎一蛇を左右に飼ひ慣らした消息と「趙州放下著」の古則に對して、北宋代の黃龍慧南(普覺禪師、一〇〇二—一〇六九)が「一物不將來、肩頭担不起、言下忽知_レ非、心中無_レ限喜、毒惡既忘_レ懷、蛇虎為_レ知己、光陰幾百年、清風猶未_レ已」と頌で贊したことを伝えている。また『景德伝燈録』巻八「潭州華林善覺禪師」の章には、

一日、觀察使裴休訪_レ之問曰、師還有_レ侍者_レ否。師曰、

有二箇箇。裴曰、在_レ什麼處。師乃喚_レ大空・小空。時二虎自_レ庵後_レ而出。裴親_レ之驚愕。師語_レ二虎曰、有_レ客且去。二虎哮吼而去。裴問曰、師作_レ何行業、感得_レ如斯。師乃良久曰、會麼。曰、不_レ會。師曰、山僧常念_レ觀音。とあり、洪州宗(南嶽下)の馬祖道一(大寂禪師、七〇九—七八八)の法嗣である華林善覺が大空・小空という二頭の虎を侍者として飼ひ慣らし、觀察使の裴休(七九七—八七〇)を仰天せしめた故事を伝えている。

(69) 享保四年(一七一九)に東福寺第三五三世の千巖師諱(一六七〇—一七三七)が記した跋文を付する木版本『獅子絃』一卷が鎌倉の松ヶ岡文庫に所蔵されており、『五山文学新集』別巻一「詩軸集成」に翻刻されている。また別に金沢市立玉川図書館にも原本の模写らしい一本が所蔵されているが、これには表題が存していないとされる。『獅子絃』には聖一派の禪者を中心に多くの五山僧が偈頌を寄せているが、「前東福」の肩書きで偈頌を記しているのは、邵元のほかに第二九世の鑑翁士昭(一三六〇)と第三七世の檀溪心涼(一三〇二—一三七四)と第四一世の西源景師(一三三七—一四〇一)の四人であり、また「東福」という現住の肩書きで偈頌を寄せているのは第四五世の日田利涉(一三八四)である。

(70) 一峰通玄は無比單況の依頼で『獅子絃』の跋を撰してあり、そこには「永和四年戊午七月二十三日、雲州安國一峯通玄

跋」とあるから、出雲（島根県）の安国円通寺の住持であったことが知られる。

- (71) 虎関師鍊（海蔵和尚）は元亨二年（一一三二）に『元亨釈書』三〇巻を完成させ、その入蔵を幾度か朝廷に上表しているが、その志しを遂げることなく貞和二年（一一三六）七月二四日に示寂している。その後、その意志を継いだ門人の無比単況が同門の師兄で醍醐天皇の皇子であった龍泉令淬（？一三六五）に入蔵の上表を申請せしめており、延文五年（一一六〇）六月七日に陳許されている。これを記念して総勢五三人の禪者が七言絶句の賀頌を寄せたものこそ「獅子絃」一巻にほかならない。

- (72) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』（家わけ第二十）「東福寺文書之一」の七三に所収される「東福寺維那寮月行事須知簿」にも、「十一日」の箇所に「古源和尚 十一月」とあり、毎月一日に月忌が営まれていたことが知られる。

- (73) 『仏果圓悟禪師碧巖録』の参学嗣法比丘普照の序文に、
銀山鉄壁、孰敢鑽研、蚊咬鉄牛、難為下口、不逢大匠、焉悉玄微。
とあり、銀山鉄壁とは蚊子が鉄牛を咬むごとく歯の立たないことと同義に扱われており、取り付く島もない難攻不落の堅固なさまに譬えられている。類似した表現に「壁立万仞」があり、やはり分別や知解によっては及び難いことを意味する。

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

- (74) 邵元が示寂した当時、土俵は嵯峨野の臨川寺の住持となっており、すでに述べたごとく夢窓疎石の十三回忌と潜溪処謙の三十三回忌を挙行している。

- (75) 祖応は東福寺の潜溪処謙に参じて蔵主にまで昇任したものの、その後、郷里の出雲（島根県）に隠棲すること三〇年に及んでおり、応安二年に至って上洛して東福寺第四〇世となつてゐる。祖応には『夢巖和尚語録』（大智円応禪師語録）とも、『早霖集』（五山文学全集）第一巻に所収）が存している。

- (76) ちなみに邵元を東福寺住持に拝請したことも知られる一条経通も、貞治四年（南朝の正平一〇〇年、一一三六五）三月一〇日に四九歳で没しており、後芬陀利華院と号されている。『夢巖和尚語録』によれば、夢岩祖応は「追悼一条相府」を残している。

- (77) 邵元が示寂した当時、周信は貞治三年四月に鎌倉円覚寺の東林友丘の席下で後堂首座となつており、貞治五年にはやはり円覚寺の不聞契聞の席下で前堂首座と勤めている。その後もほぼ鎌倉禪林にあつて住持職などを歴任しており、康暦元年（一一三七九）に至つて、ようやく上洛して建仁寺の住持となり、さらに邵元も住した京都等持寺の住持に就任している。

- (78) 臨江寺に所蔵される寛文一〇年（一六七〇）から安永二年（一七七三）に及ぶ『過去帳』に、

建長開山始祖賜諡大覚禪師蘭谿道隆大和尚

建長開山仏国応供広濟国師。弘安二戌十月朔日。

東福開山聖一國師大和尚禪師。弘安三庚辰十月十七日。

西禅開山真空妙応禪師。弘安二戌二月五日。

桂昌開山雙峰宗源国師。延元元子十月朔日。

当寺開山古源邵元禪師。師諱邵元。桂昌三世、双峰之子。遊歴宋国、二十有一年、貞治三年甲辰十一月十一日

化。元文四年未迄、三百七十五年也。

前住当山天栄寿公首座。正保元甲七月十五日。

当寺中興忠嶽祖信座元。元禄四未三月廿四日。单寮号。

元文五甲春。

前住当山明峰祖歴座元。元文三年十月初二日、於西禅寺

化、一年余住持。当寺二念年住、東門寺二九年住。

として江戸期に至るまでの歴住の消息を伝えている。邵元

より先に名が挙げられている蘭溪道隆(大覚禪師、一一二

三・一二七八)・高峰顕日(仏国応供広濟国師、一二四一

一三二一六)・円爾(聖一國師)・真空妙応(?)・一三五

一)・双峰宗源の五禅者は後に遡つて勧請されたものであ

り、邵元より後に書かれている天栄 寿(?)・一六四

四)・忠巖祖信(?)・一六九一)・明峰祖歴(?)・一七三

八)の三禅者は遙か後代の江戸初中期に臨江寺に住持した

禅者である。邵元より天栄寿に至る三世紀近い間、臨江寺

が如何なる禅者によつて維持されていたのかは定かでない。

(79) 兵頭正「臨江寺、善福寺に於ける僧古源の位牌について」
『長濱史談会』長濱史談』第六号、昭和五十七年二月)を参
照。

(80) 平成二二年(二〇〇〇)七月、筆者は愛媛県喜多郡長浜町
下須戒の水照山臨江寺を訪れる機会を得、住職の篠崎宗鑑
老師および奥様の富喜子氏と懇談することができた。現今、
臨江寺には邵元ゆかりの品や頂相などは何ら所蔵されてい
ない。ただ、臨江寺を訪れたのが縁で、平成一四年四月に
老師の長女である篠崎恵子氏の依頼を受けて、邵元に関す
る顕彰碑を撰文することができたので、その全文を紹介す
ることにしたい。

當寺開山古源和尚顯彰記。

時平成十四年壬午歲霜月十一日、当古源和尚之忌

日立石。

越後少林寺二十三世、洞嶽秀孝叟、応_レ求撰_レ之。

伊予臨江寺現住比丘宗鑑、為_レ報恩顯彰、建_レ立_レ之。

東福二十五世伊豫臨江開山古源和尚顯彰記。

宋元之間、日域之僧、多赴_レ彼地、漢地之僧、又来_レ我國。

聖一國師、親嗣_レ無準、止_レ住東福、振_レ其法門、門流隆

盛、慧日永輝。茲有_レ古源和尚、諱邵元。別号_レ如幻道人、

称_レ物外子。越前人也。嗣_レ双峰源公、列_レ聖一法孫。嘉

曆二年、遙入_レ大元、歴_レ遊雪峰山・天台山・天目山・伏

龍山、參_レ学江南宗匠。北詣_レ五臺、西赴_レ玉泉。時思庵

讓公、伝曹洞宗旨、董嵩山少林、尊師高德、又任版首。讓公示寂後、一山大衆、推拳師令撰惠庵碑銘。其石碑耐六世紀半風霜、現存嵩山少林与泰山靈巖。日中友好二千年之絆、將窮于古源和尚哉。在元二十年、貞和三年帰国、時夢窓国師、請師任天龍寺首座。遂開堂山城大聖寺、次幕府請住等持寺。関白一条経通公、延師陞東福寺。又赤松撰津守則祐公、延師董播磨法雲寺。一条公慕師、再住東福。後退休南泉庵。貞治三年仲冬十一日、書遺偈曰、末後一句、始到牢関、擊碎鉄壁、踢倒銀山、阿呵呵。世寿七十。嗚呼、水照山臨江寺者、伝古源和尚開創之古刹也。只惜未詳師到伊予之年記。其風光明媚、恰如望江南勝境。恐是古源和尚、帰国上洛之日、過此地乎。山称水照、遥慕大元山水、寺名臨江、遠仰臨濟宗祖。平成十五癸未歲者、和尚寂後六百四十年之遠忌也。茲思慕其高風、建立石記、永顯彰者也。

以上がその全文であるが、これを機に邵元の事跡が広く日本国内に顕彰されることを望むものである。

- (81) 夢窓派の春屋妙葩の法嗣である汝霖妙佐(良佐・周佐)の『汝霖佐禅師疏』、『五山文学新集』別巻二に所収)には、
詠南源住賀州安国諸山 応于東漸和尚之求。
惠日昇時、争覩高明先兆、臥雲深处、允惟至化難逃。

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

某、盖土之時詘時信、厥行簡雅、而天之可速可久、厥姿瑰偉。一代風流、斯文將浚北碕、千衆圍繞、其位直奪南泉。墮地俊駒、冲天快鶻。龍門亭畔、價報大王之來、鹿苑院中、親承上相之帖。明珠易獲、華袞非荣、非惟安国利民、抑亦扶宗輔教。万松壽壽、氣秀双峯之春、二柱昌昌、讖版三葉之裔。幸作大綱小紀、相望北斗南箕。

という諸山疏が載せられている。これも昌説が加賀安国寺に入院する際のものであり、この諸山疏を妙佐に依頼したのは、やはり聖一派栗棘門派で東福寺第六七世となった東漸健易(潛室、一三四四—一四三三)であったとされる。室山孝「加賀安国寺と寛正三年「白山河」大洪水」(加能地域史』第一六号)によれば、加賀安国寺はかつて能美郡の平野部に存し、その実質的な開山は越前出身の古源邵元であり、師の宗源を開山に勧請したのではないかという推測をなしている。

- (82) 夢窓派の義堂周信の『空華集』巻五「七言絶句」には、
和答南源首座剪花之什 四首。

枯株不待斧斤裁、借得凌霄生意回、多謝天公憐老朽、枉劳雨露潤田埃。
拈華嶺上一枝開、憶得曾遊逸興催、一笑相逢皆老大、加梨倒掛舞三臺。
故人猶是旧時看、瑠刻開花供詩案、未信老身如枯

松、偷得春色寄青臺。

南泉接得陸郎來、曾指牡丹庭下栽、今日看花真似夢、也知万物本同胎。

という四首の偈頌を載せている。当時、昌誥が周信の席下でか首座を勤めていたことが知られる。同じ周信の『空華日用工夫略集』四(至徳)三年丙寅の「六月一日」の箇所には、

六月一日上堂。說法罷下座。衣鉢侍者告玉振岩・誥南源聽法。然在衆中立。余不能見及。故欠謝。

という記事が見られる。これは至徳三年六月一日に周信が上堂した際に、振岩、玉と昌誥がその座下において説法を聴聞したことを伝える消息である。ちなみに振岩玉とは聖一派の大陽義沖(黙庵、一一八二—一三五二)の法を嗣いで東福寺第三五世となった振巖芝玉(一一三九)のことである。

(83) 明極楚俊(仏曰焔慧禪師、一一六二—一三三六)の法孫で焔慧派の惟肖德巖(双桂・蕉雪、一一六〇—一四三七)の『惟肖焔禪師疏』(『五山文学新集』第二巻に所収)に、
南源住凌霄山普門寺諸山疏 南泉古源法嗣。

雲和之琴、孤竹之簫、天律自諧。新甫之柏、徂徠之松、土宜久著。故称風流者販王謝、而論閎闊莫若崔盧。某、逸韻掀騰、神羊簡雅。師資密契、謂南泉臥如來、手段尤高、誇西河弄師子。靈芝暉暉、嫩桂昌昌。安國

鉅斧暫閑、六月而息、凌霄聘書屢至、三年以鳴。宗盟雖先諸姪、史册必書列國。心乎愛矣、初非南海北海之遙、礼以接焉、毋渝東隣西隣之好。

という諸山疏が伝えられている。これは昌誥が普門寺に住持する際に德巖が撰した疏にほかならず、明確に南泉庵の古源邵元の法嗣であることが付記されている。ちなみに『東福寺誌』巻末の「京兆 凌霄山普門寺歴代」によれば「五十三世南源昌誥 東福七十一世」と記されている。

(84) 南源昌誥については、法燈派の在庵普在(仏惠広慈禪師、一一九八—一三七六)の門人(祥麟普岸のことか)が著した『雲巢集』(『五山文学新集』第四巻に所収)「偈頌」に載る「三山曇伊和答建仁寺諸老軸」の中にも、
僧依栢庭尊丈殿押、代同社三山上人、奉富大龍方丈来意之重、兼寓仰徳之心云云示。 池易昌誥。

臨風每嘆壯懷孤、未得清談一夕娛、故臨向來窺美玉、新篇今日獲明珠。它年泰斗瞻師表、何処林丘寄我愚、緬想遠公蓮社裏、応無啼鳥勸提壺。

という偈頌が存している。三山曇伊とは後に聖一派より大覚派に転じた仲方円伊(懶室・蘭室、一一五四—一四一三)のことであり、大龍方丈とは建仁寺大龍庵に退閑していた一山派の蘭洲良芳(弘宗定智禪師、一一〇五—一三八四)のことである。ここにいう池易の昌誥が南源昌誥のことを指すのであれば、池易とはおそらく昌誥の出身地を意味し

ていると見られるが、具体的に何れの地を指しているのかは定かでない。

(85) 徳海昌輝については、やはり『雲巢集』「偈頌」の「日州龍興山大慈禪寺八景」の「東宮秋月」において、

嚴肅猶如「細柳營」、闐闐唯有「月華明」。往時「庚亮異何淺」、今日劉琨嘯又清。北度冥鴻秋万里、南飛寒鶴夜三更。軍中若「賦」些兒句、吟裏須「堅」五字城。

東福源輝。

という偈頌が存している。これは聖一派の玉山玄提（仏智大通禪師）が開山となった大隅（鹿児島県）曾於郡志布志の龍興山大慈禪寺の八景に対する作であるが、東福寺の源輝というのが徳海昌輝のことではないかと推測される。また同じ『雲巢集』「偈頌」の「三山曇伊和啓建仁寺諸老軸」の中にも、

代「三山上人」、依「皓隱座元員」。赤城源輝。

來訪禪翁方丈中、岩嶠蘭若洛之東。檐前飛瀑挹「修白」、門外長橋截「軟紅」。金鼎香浮闍「柏子」、銅瓶湯老愛「松風」。余波可「有」照隣德、喜見「新篇」詩語工。

という偈頌が存している。ここにいつ赤城の源輝がやはり昌輝と見られるが、赤城が昌輝の出身地であるならば、上野（群馬県）の赤城の人であったことになるのか。

(86) 惟肖得巖の「惟肖巖禪師疏」の「疏」下、

徳海輝首座住「万松山崇聖禪寺」諸山疏

漢廷得「士盛」、東馬巖徐起「家滿」朝、周室以「宗強」、魯衛

入元僧古源邵元の軌跡（下）（佐藤）

晋鄭裂「地疏」爵、青髭固為「旧物」、白鬢寧借「先容」。某韶灌雅渾、瓊瑜温潤。拈「起鎮州蘆菴」、親見「南泉老師」、併吞「楊岐栗蓬」、不謬「東山直下」。得「一夔」以足矣、累「百鷲」將奚為。虛室天遊、久嚮「平章風月」、祖庭秋晚、翼背「一曲陽春」。期望匪「輕」、関系尤「重」。烏不「為鶴不鶴」、必也正名、桂生「桂桐生桐」、去「其非」類。大張「旗鼓」、同恤「簡書」。

という諸山疏が存している。これはそれまで首座位であった昌輝が万松路山崇聖寺に住する際の疏であり、その中で明確に聖一派の直系で南泉老師すなわち邵元の法を嗣いでいることが記されている。

(87) 『碧山日録』の応仁二年（一四六八）の「十二月二十五日」の条に、

誚南源、号「老漢」為「隆中」。其「幘子」、八月為「西賊」遺書。紹首座、於「四条街店」親「之」、便購以見「寄」。感「其再入手」、不「覺垂」泣。其在「平它」、則不「足履」屐、予秘以亨「之」千金也。

とあり、南源昌誚の門人に隆中という道号を与えられた法嗣が存したことを伝えている。

(88) 京都国立博物館・東京国立博物館編「雪舟 没後五〇〇年・特別展」『（二〇〇二年三月刊）』に京都東福寺に所蔵される伝雪舟筆の「東福寺伽藍図」を収めており、図の上部に永正二年（一五〇五）六月二〇日に前南禅の了庵桂悟が

撰した贊・書が記されているが、そこに「桂昌 宗源、謚「双峰国師」、昌下南泉・芬陀・大仙」とあるから、一六世紀においても桂昌院の子院として邵元の南泉庵、定山祖庵の芬陀華院、大方源用の大仙庵などが存していたことが知られる。

(89) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』(家わけ第二十)「東福寺文書之三」の五二三に所収される「東福寺南泉庵領年貢注文」として、

東福寺塔頭南泉菴領土貢之事。

合参拾貢文者。

右所注進申之状如件。

応永廿九年十一月七日、塔頭 昌瑞「花押」

という年貢の注文に関する古文書が伝えられている。応永二九年(一四二二)の時点で昌瑞という禪者が塔頭の塔主として南泉庵を守っていたことが知られ、この人も南源昌や徳海昌輝と同じく「昌」の系字を受けており、おそらく邵元の法嗣が法孫に当たる人であろう。

(90) 中古以来、宇賀神は福の神ないし數霊の総称であり、日本では辨才天と同一視されて天女の姿をしている。日本で偽撰された『辨才天三経略疏』巻一に「宇賀耶、梵語、即天女号也」とあり、『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』にも「是時、金剛手菩薩即告大衆言、汝等当知、今此会中有二神王、名曰宇賀神将。(中略)宇賀神王從座中

顯現、其形如天女、眉白、頂上有宝冠。冠中有白蛇、其蛇面如老人。(中略)復此神王、身如白蛇、如白玉」とある。

(91) 根津美術館編『墨の彩 大阪・正木美術館三十年』(平成一〇年一〇月発行)の二六頁には、南北朝時代の古源邵元贊「白衣観音図」一幅が載せられている。この画贊は絹本墨画淡彩で、縦六一・三センチ、横二九・六センチとなっている。いま、京都造形芸術大学教授の金澤弘氏の解説(二二四頁)を載せるならば、

図の右下に画家印と思われる鼎印と朱文印が捺されるが、印文は不祥である。

とし、贊者の邵元の日本における事跡を簡略に挙げた後、景観描写として、入り組んだ荒々しい筆致の岩の間に小滝をあしらい、大きな円光の背後に没骨描の懸崖と鷲を描き、硬い輪郭線による精緻な観音像を浮き上がらせ、面と線の二つの要素を巧みに組み合わせ、安定した構図を作っている。また観音が肘を乗せる岩を横から突き出すように描く形は、良全の「白衣観音図」(妙興寺蔵)などにもみられる手法である。この図の贊の年代はわからないが、古源が晩年を過した東福寺周辺の妙手の存在を予想させる。

とこの図を分析している。また正木美術館の昭和六二年度秋季展の『人物』の図録で、学芸員の高橋範子氏は「室町

を中心とした人物画 正木美術館蔵品より」と題して、

乾峯と同じく、南山土雲に参じた古源邵元はおそらく、乾峯と同じぐらいの年齢であつたらうし、修業僧として彼らは、東福寺を中心にして、非常に近い間柄であつたのではないかと思える。観応(一一五〇—一一五〇)の頃、古源もまた、東福寺二十五世に住した。この古源が贊詩を寄せる白衣観音図(本目録六頁)は、彼のそういった文化的な背景の期待に答えるかのように、冴えた筆致が目をはひく洗練された画風をしめしている。(中略)古源贊の観音図は、了庵清欲の贊詩をもつ図と同様に、横向き加減に姿勢を崩し、岩にもたれかかるように坐す観音を描く。そこでは、礼拝の対象としての観音の荘嚴さは希薄である。どちらかと言えば、了庵清欲贊の図は、焦点を観音そのものに当てるのではなく、背景の山水の景観にあわせることにより、客観的な図となつてゐる。そういった意味からすると、古源贊の図は、岩上の観音を画面中央に配し、大きな光背を描くことにより、前図よりは、観音そのものの意味を重視する。本図はまだ、個人的な信仰の対象としての、宗教的な役目になつてゐたものと思える。

と云う解題(一一三頁)を付してゐる。

(92) 草山祖芳(号は樹下堂・漢興、一七三三—一八〇六)の

『樹下堂漫記』巻二下、

入元僧古源邵元の軌跡(下)(佐藤)

然可翁観音。古源邵元贊曰、現三十二応、施四七無畏、雖隨類化見、不離三摩地。邵元拝贊。

右東木屋町四条上ル平野屋喜左衛門所蔵。

とあり、邵元が大応派の可翁宗然(普濟大聖禪師、?—三四五)の描いた観音菩薩像に贊を付したとする記事が見られる。祖芳の当時、この画贊を所蔵していたのが京都東木屋町四条上ルに居していた平野屋喜左衛門であつたことが判明する。その後、この画贊が如何なる変遷を辿つたのかは定かでないが、現在、大阪府の正木美術館にこれが所蔵されている。

(93) 根津美術館編『墨の彩 大阪・正木美術館三十年』の二〇頁には、南北朝時代の古源邵元墨蹟として「正法眼蔵涅槃妙心」とのみ書された一幅が載せられている。この墨蹟は紙本墨書で、縦一〇・三センチ、横五五・八センチであり、左下部に「古源」の朱文方印が押されているのみである。根津美術館学芸員の菅原壽雄氏は邵元の略伝を記した後、

これは広く知られた二句であるから、別して釈くこともないが、『無門関』の第六則。拈華微笑の場における釈尊の言で、不立文字・教外別伝としての禅の核心を示したものである。

という簡略な解説(一一二〇頁から一一二二頁)を施しており、草書体の邵元の筆跡としては貴重である。

(94) 『扶桑五山記』五の末尾に『統正法論』を載せているが、そこには、

貞治六年九月日、副墨子洛誦孫等曰、東福芬陀利華院祖
定山和尚製 嗣『双峯源』。

とあり、定山祖禪の著述であることを伝えている。

(95) 『白石虎月編』東福寺誌の「応永二十年」の箇所に『金山和尚語要』からの引用として、

宗源双峯国師、以『常楽国師』為父、自『世尊』五十六葉、
授受之際、丁寧告戒也。兄『東山』而置『東福』者、十有二
員、以『徳輔』時、以『戒王』汝於成也。當此之時、居者
戒鏡、來者戒珠。放逸之輩、自愧自悔、不頑廉懦立、
少不令『遲留』。知『諸常楽国師』照『東山親書』之禪軌、軌見
在『三万年東麓』。曰、寺内不可取『入五辛』等。所住僧衆、
非『淨潔梵行之人』、不可共住。撰身而以『坐禪』為業、
歛意而以『辨道』為念、透『仏祖不伝之妙』、可『紹』徑山
先師之宗。曰、止住僧徒、可『持戒持律』、不爾者不可
令『止住』。若有『破戒之者』、速可令『追放』也。於『四重罪』
一者、燒却其衣鉢、触『武家』申『公家』、可令『流在』。条
繁茲略焉。(中略)波羅提木叉、行古則清淨境、界天壤
因地、栴檀生鸞鳳宿。虎闕・直山・乾峯・固源・定山、
尤傑然也。行道各有『其地』哉。愚直豐城、可庵參州、嶺
翁伊川、其龍飛象歩之者、何暇日枚挙焉。

という記載が存している。聖一派の金山妙絶(金峰、一三

四九 一四一三)は大道一以の法嗣であるが、ここでは双
峰宗源の禪規を挙げた後、聖一派で東福寺に住持して戒律
を厳格に守った禅者として虎闕・直山・乾峯・固源・定山
という五人の傑出した禅者を挙げている。虎闕とは第一五
世の虎闕師鍊(海蔵和尚・本覚国師、二二七八 一三三四六)
のことであり、直山とは第一〇世の直翁智侃(仏印禅師、
一一四五 一三三二)のことも見られるが、時期的には
第一六世の直山玄侃(？ 一三三七)のことを指していよ
う。また乾峯とは第一七世の乾峰士曇のこと、定山とは第
二七世の定山祖禪のことであるが、固源とあるのは古源の
誤りで、第二五世の邵元のことを指しているものとみてよ
い。帰国後の邵元が聖一派の禅者として厳格な行持を重ん
じていたことが推察される。